

も行った——實際、少しでも若しやと思ふ所があれば、何處といふことなしに駆け廻つた。

彼女は此の恐ろしい災難の前に気が違つて行くやうな心持で一日待ち暮らした。

ロアゼルは夜になつて、窪んだ、蒼白い顔をして歸つて來た。何にも見付からなかつたのだ。

『お前、お友達のところへ手紙を上げて置かねばならんよ。』と彼は言つた。『頸飾の留金を毀したから直しにやりましたつて。さうすれば幾らか猶豫が出來ようから。』

彼女は夫の言ふまゝに書いてやつた。

一週間の後、あらゆる望みの綱は切れ果てた。

そしてロアゼルは、五年も老けたやうになつて、言つた。

『どうしてあの寶玉の償ひをしたものか、考へなければやアならん。』

つぎの日二人はそれの入つてゐた箱を持つて、中に記してあつた名前の

寶玉商の所へ行つた。寶玉商は幾冊もの帳簿を調べて見た。

『其の頸飾の方は、手前共でも賣り申したのではございません。へえ。手前共では唯だ其の箱だけ願つたものと見えます。』

そこで二人は、心配やら苦痛やらで病氣のやうになつて、先のと同じ頸飾を求めようと、記憶を辿りながら、寶玉商から寶玉商へと尋ねて行つた。

二人はバレエ ロイヤルの一軒の店で、探してゐたのとそっくりなダイ

ヤモンドの頸飾を見付けた。直段は四萬フランであつた。三萬六千フランならば買へた。

二人は向ふ三日の間は賣らずに置くやうに寶玉商に頼んだ。そして、もし二月の末迄に先のが見付かつた時は、三萬四千フランで買戻して呉れるやうにといふ契約をした。

ロアゼルは父が残した金を一萬八千フラン持つてゐた。彼は其餘を借りようとした。

彼は甲から一千フラン、乙から五百フラン、此處で五ルイ、其處で三ルイといふやうにして借りた。高利貸は勿論、あらゆる種類の金貨に關係をつけて、證書を作つて零落るまでの負債をした。彼は果して拂ふことが出来るかどうかを知らずに署名を敢てして、これから後の一生を犠牲にし

た。そして、なほこの上に來るべき苦痛や、將に落ちて來ようとしてゐる悲惨の暗い影や、あらゆる物質上の缺乏や、あらゆる精神上の苦痛やを受けねばならぬといふ見込などて恐れを抱きながら、彼は寶玉商の所へ行つて、其の勘定様に三萬六千フランを置いて新しい頸飾を買つた。

ロアゼル夫人が頸飾を返した時に、フォレスチエ夫人は冷たい様子を言つた。

『もつと早く返して下さらなさいやア困りますわ。私の方で要らないとも限りませんもの。』

夫人は、もしやと友達の非常に恐れてゐた其の箱の蓋を開けなかつた。もし品の變つたことを見付けたとしたら、果して何と思つただらう？ 何と言つたであらう？ ロアゼル夫人を泥坊と思ひはしなかつたらうか？

ロアゼル夫人は今こそ貧乏暮らしの恐ろしいことを知つた。しかも彼女は忽ち勇猛心を振り起した。この恐ろしい負債は拂はなければならぬ。彼女はそれを拂はうとした。で、召使には暇をやつた。住居は變へて、屋根の下の部屋を借りた。

彼女は家事の骨の折れることや、勝手働きのいやなことを知るやうになつた。薔薇色の爪を油の染みた鍋や皿につけて、食器を洗つた。汚れたシャツや、肌着や、布巾などを洗つて、繩にかけて乾しもした。毎朝下水を街に荷ひ卸した。そして水を運び上げる時は、一段ごとに休んで息を繼いだ。また下等社會の女のやうな風をして、腕に籠をかけて、八百屋へも、乾物屋へも、肉屋へも行つた。直段の懸引から悪口されることはあつても、其の苦しい金を一スツづゝなり貯蓄しようとした。

毎月二人は、幾らか拂つたり、書換へたり、日延をしたりせねばならなかつた。

夫は夕方、さる商人の勘定書の清書をやつた。そして夜は遅くまで、一頁五スウの筆耕を折々やつた。

かくてこの生活が十年間續いた。

十年目の終りに、高利の利子から利に利を積んだ借財まで、一切合切返済した。

ロアゼル夫人はすつかり老けて了つた。貧乏世帯の世話女房となつた。力は強く岩乗になつて皮膚は荒れた。髪は亂れるし、スカアトは歪むし、手は赤くなつて、床に雑巾掛けをしてゐる時などは高調子に物を言つた。けれども、夫が役所へ行つて留守の時など、時々窓の傍に坐つて、ずつと

以前のあの楽しかった晩のことを、自分が美しくてちやほやされた夜會の時のことを思ひ返した。

もしあの頸飾を失くさなかつたならば、何うなつたらう？ 分るものか？ 分るものか？ ほんとうに人の一生位不思議な變り易いものはない！ ほんとうに些細な事が吾々を榮えさせも枯れさせもするものだ！

所が、ある日曜日のことであつた。一週間の氣晴らしをしようとしてシヤンゼリゼエへ散歩に行くと、ふと、子供を連れてゐる一人の婦人が目に付いた。それはフォレスチエ夫人で、やはり若くて美しくて愛嬌があつた。ロアゼル夫人の心は動いた。彼女は言葉をかけようとしたか？ さうさ、無論のことだ。金は拂つて了つたし、今こそ彼女は、それについての一部

始終を打明けようとした。構ふものか。

彼女は近寄つた。

『まあジャンヌさん、暫くしてわねえ。』

一方はこんな賤しい上さんから馴々しく呼びかけられたので驚いたが、少しも見覚えがなかつたので、訥りながら言つた。

『だつて——あなた！——私、存じませんが——お間違ひぢやありませんの。』

『いしえ。私、マチルド ロアゼルですわ。』

友達は叫びを發した。

『まあマチルドさん！ お變りなすつたこと！』

『え、私、あなたとお別れしてから、随分長い間、苦しい情ない日を送

りました——それが、もとはみんなあなたから起つたことなの！」

「私から！ まあ何うして？」

「あなた覚えていらつしやいますか、大臣さんの夜會で着けるッて、あなたにダイヤモンドの頸飾を貸して頂いたことを？」

「ええ。それで？」

「あれを私失くしましたの。」

「まあ、何をあなたは仰有るの？ お返しなすつたぢやありませんか。」

「お返ししたのは、そつくり同じですけれど別のですわ。それで、私共は其の拂ひに十年間かゝりましたの。お存じてせうが、何にも無かつた私共には中々容易なことではありませんでしたわ。でもやつと済みましたので、私、嬉しうございますの。」

フォレスチエ夫人は立止つた。

「ぢやあ、あなたは、私の代りにダイヤモンドの頸飾を買つたと仰有るんですの？」

「ええ。ぢやあ、あなたはお氣が附かなかつたのねえ！ 尤も非常によく似てゐましたわ。」

かう言つて、彼女は一寸得意な、子供らしい喜びの色を浮べて微笑した。フォレスチエ夫人の心は非常に動いて彼女の両手を取つた。

「まあマチルドさん、お氣の毒なことをしましたわねえ！ 私の頸飾はま

やかしものでしたわ。やつと五百フラン位の値打しやないものでしたの
にねえ——

二つの髪飾りの間に、
有リくやー見えんよ。

盲
人

何うして日光は吾々にかやうな喜びを與へるのであるか？ その光輝の地上に落ちる時に、何故吾々はかくまで生の喜びを以て充たされるのか？ 空は何處までも青く、野は見る限り緑に、家は眞白に輝き渡る。と、吾々の眼は夢見心地になつて、心靈に悦樂を持來す其の赫奕たる色彩に見入る。そして其の時、吾々の胸には、躍りたいといふ願ひ、走りたいといふ願ひ、歌ひたいといふ願ひ、楽しい浮々した思想、一種の懐かしい情愛などが起つて、果ては太陽を抱きたいとさへ憧れ思ふ。

盲人は戸口に坐つてゐても、永劫の暗に鎖されて無感覺であるから、こ

の爽かな悦樂の中に在つても矢張り平常と同じやうにぢつと静かにしてゐる。そして、周囲に起りつゝあることを認める由がないので、彼等の犬が跳ね廻らうとするのを絶えず抑へてゐる。

かくて其の日も暮れ方になつて、彼等が幼き弟か、小さい妹の腕を頼つて家庭の團欒に歸らうとする時、もし其の子供が『好いお天氣だつたねえ。』といふならば、彼はかう答へる。『好いお天氣らしかつたよ。ルウルウがぢつとしてゐなかつた。』

私はさういふ不幸な人で、其の生涯は、進も考へられぬほどに悲慘を極めた一人の人を知つてゐる。

それはノルマンデイの百姓の子であつた。父や母が生きてゐた間は、まだ多少は心に懸けられてゐたから、その恐ろしい疾病の外にはさまでてに苦

しみもしなかつたが、一度び其の老人達が世を去つてからは、忽ちみぢめな無残な生涯が始まつた。妹の家に寄食者となつてゐたが、其の一家のもの、まるで、他人のパンを食つてゐる乞食のやうに彼をあしらうた。食事の度び毎、彼の嘔下す食物は非難嘲笑の的となつて、彼は穀潰し、能なし猿と呼ばれた。妹婿は彼の遺産の分前を全く横領してゐながら、スープは濫々と與へられて、唯だ辛うじて露命を繋ぐに足るだけであつた。

彼の顔色は非常に蒼ざめて、二つの大きな白い眼は封糊のやうであつた。彼は幾ら侮蔑を蒙らされても、少しも頓着するといふことがなく、何時も固く自分を守つてゐたので、人は彼が果してそれを感じたかどうかをさへも知ることが出来ぬ位であつた。

それに彼は、母にも率氣なくあしらはれて、慈愛を受けたことが滅多に

なかつたから、優しい味といふものを全く知らなかつた。一體、田舎に於いては、役に立たぬものは憎まれるのが當り前で、百姓は牝鶏と同じやうに、おのが種族の弱者を殺すを喜ぶものである。

スープをがつ／＼飲んで了ふと、彼は、夏は戸口に行き、冬は爐の隅に坐つて、それから後は終夜少しも動かなかつた。手眞似をするでもなければ身動きをするでもない。唯だ其の臉のみが、或る神経作用の爲めに顔へて、時々、其の白い視力のない眼球の上に蔽ひかぶさるばかりであつた。彼は一體、智力や、思考力や、彼自身存在の意識やを、幾分なりとも有つてゐたであらうか？ 誰も彼が有つてゐたかどうかといふことを穿鑿しよらうとも思はなかつた。

幾年かの間、事態はこの有様で過ぎた。所が、彼が何事をも爲し得ない

といふこと、何事にも無感覺であるといふこと、は、とう／＼親族の者を怒らせた。そして彼は、周圍に集まつてゐた畜生のやうな人々の爲めに、其の殘忍な天性や野蠻な悦樂やの犠牲に供せられて、笑柄となり、傷ましい道化役となり、さてはまた餌食となつた。

彼の盲目なのに乘じて工夫されたあらゆる非道な惡戯を想像することは造作もない。今や人々は彼を養うてやる代りに慰みを取らうとして、彼の食事を、近所の人に取つての快樂の時、便りなき彼其の人に取つての懲罰の時とした。

近所の百姓達は忽ちこの饗宴に集まつて來た。やがて、そのことが家から家へと語り繼がれたので、毎日其の百姓家の臺所は人で一杯であつた。時としては、人々は彼がスープを啜り初めようとしてゐる時に、犬か猫か

をテエブルの上にのぼせて、彼の皿の前に置いた。動物は天性で其の人間の不具なことを直ぐに嗅ぎ分けて、そつと近づき、音をも立てずに食ひ初めながら、さも旨さうにスープを舐る。そして、やゝ高い舌打の音が哀れな人の注意を喚び覺ました時は、盲人が無暗に振り廻すスプーンの打撃を避けて逸早く逃げ去つて了ふ！

その時、壁に沿うて群つてゐた見物人は、互ひに腕で軽く突き合ふを相圖にとつと笑ひ出して、床を足で踏み鳴らす。それでも彼は一語も發せず、右の手で食事を續けながら、左の手は自分の皿を防ぎ守らうとするかのやうに廣く伸べ擴げる。

ある時はまた、彼が區別することの出来ぬやうなコルクや、木片や、木の葉や、甚だしきは不潔なものさへも咀ましめた。

そのうちに、人々はかういふ悪戯にも飽いて來た。そして妹婿は、何時までも養はねばならぬのに腹を立て、絶えず彼を打擲し、彼がそれを防いだり、打返さんとしたりして、空しく藻掻くのを見ては嘲笑つた。やがて新たな快樂——彼の顔をびしやりと打つといふ快樂が來た。作男も、下女も、通りがりの破落戸までも、のべつにびしやりと彼を拊つた。で、彼の睫毛は痙攣を起したやうにひつつりとなつた。が、彼は何處に隠るべきかを知らなかつたので、唯だ兩腕を高く舉げて、それで、彼に近づいて來る人々を防がうとしてゐた。

遂に彼は物乞をさせられるやうになつた。

市日毎に彼は大道の傍に置かれた。そして、人の足音や車の響を耳にするや否や、彼は帽子を前に出して、吃りながら、

「御慈悲に、どうぞ！」と叫んだ。

けれども、百姓は無駄錢を使はないので、幾週間経つても、彼は一文の錢だに家へ持つて歸らなかつた。

そこで、彼は残忍な無情な憎悪の犠牲となつた。て、以下記する所は彼

が死んだ顛末である。 隆河を相見、流し、
ある冬、地は一面に雪で覆はれて恐ろしく寒かつた。其の季節の或る朝、
妹婿は大道を遠くの方まで施與を乞はしめようとして彼を連れて行つた。

盲人は終日其處に置かれた。
夜となつた時に、妹婿は一家の者に、乞食の行方が分らなくなつて了つ

たと語つた。そしてかう附け加へた。
「ほんとに世話の焼けることだ！ が、何も心配するにも及ぶめえ！ 寒

くて凍えてゐたて、誰かが連れて行つたのだらう。心配するでねえ！ 失
くなりッこはねえだ。明日の朝は早く、スープを食べる間に合ふやうに歸
つて来るだらう。」

が、次ぎの日になつても彼は歸つて來なかつた。
盲人は長い間待つてゐたが、寒さの爲めに身體はだん／＼硬くなつて、

死にさうな氣持になつたので歩き初めた。けれども道には氷が厚く張り詰
めてあつて、歸り途を探し當てる事が出來なかつたから、彼は唯だ當て

なしに歩き廻つた。幾度も溝に落ちてはまた這ひ上つた。聲は一語も立て
ずに、唯だどんな家でも見付けて、其處で一夜を明かしたいものだと思つ

た。
けれども、ますます強く降つて來た雪は、次第に彼を麻痺させた。て、

人面獸心あるものさ

彼のかよわい手足は全く自由を失つて了つて、もはや進むことも退くことも出来なくなつた。彼は曠野の真中に坐らねばならなかつた。彼はまた起たなかつた。

小止みなく降りしきる白き雪片は彼を埋めた。やがて、彼の身體は全く固く硬ばつて了つて、見る見るうちに積り行く雪の下に見えなくなつた。そして、死骸の横はつてゐる場所を示すものといつては、もう何物もなかつた。

彼の親族のものは、それでも一週間ばかりの間は、尋ねたり探したりする風をした。泣く真似さへもした。

其の冬は殊に寒さが酷しく、雪解は容易に初まらなかつた。さて或る日曜のことである。法會にとて行く途すがら、百姓達は澤山の鴉の群を認め

た。それは曠野の上に果てもなく渦巻をなして、やがて黒い夕立の如く、一點を見懸けて重なるやうに下りて行つた。そして絶えず行つたり來たりしてゐる。

其の一週間の間、これらの淺猿しい鳥は依然として其處に在つた。空にはまるで、地平線上の隅隅から集まつて來たかと思はれるほどの群があつた。彼等は啞々と陰鬱な鳴き聲を交し乍ら、さらさらと輝いてゐる雪の上にはさつと下りて、それをば黒の補布で奇態な模様にした。そして、雪の中をば執ねくも隈なく掻き探した。

一人の若者が、彼等の爲てゐることを見に行つた。そして、端なくも盲人の屍のもう半ばを食ひ食はれて、さんぐに損はれてゐるのを發見した。其の蒼白かつた眼は、貪慾な長い嘴で啄み取られて、全く無くなつてゐた。

それからといふもの、私は晴れた日の喜ばしい光輝を浴びるごとに、何時も、其の人の恐ろしい死態は、彼を知つてゐたすべての人に對する慰安であつたほどに、宿世の拙かつた乞食の運命を侘びしく想ひ起したり、陰氣に考へ込んだりしないことはなから。

一六

此の世に生かすは、世の運命をわたり、
大剣のひらき、世の運命をわたり、
さすれば、世の運命をわたり、

樽

エブル井イユに住んでゐる宿屋の亭主のジユウル シヨは、一頭曳きの二輪馬車をマゴロアル婆さんの百姓家の前に止めた。赤ら顔の、下腹の膨れた、背の高い四十恰好の男で、世間からは中々食へない奴だといはれてゐた。

樽

彼は馬を門の柱に繋いで入つて行つた。婆さんの家の地續きに地所を少し有つてゐるので、久しい前から婆さんのをも欲しがつて幾十度か買はうとして見たが、婆さんはいつも強情にそれを手離すことを拒んだ。『わしやあ此處で生れただから、此家で死にたうござりやす。』といふのが

婆さんの返辭のすべてであつた。

彼が入つて行くと、婆さんは戸口の處で馬鈴薯の皮を剝いてゐた。もう七十二位で、瘦せて、萎びて皺が寄つて、本當に乾涸らび切つて、腰も曲つてゐたが、併し小娘のやうに元氣で疲れるといふことがなかつた。シヨは極く親しげに婆さんの背中を撫て、から、傍へ寄るやうにして腰掛に腰を下した。

『どうだね、お婆さん。いつも達者で結構だね。』

『難有うござりやす。別に不足いふこともねえし、考へることもねえだてね。あんたはどうでござりやすき？』

『あゝ難有う。相變らずだ。時々リウマチが起きてちつたあ痛むがね。これさへなければ私も不足をいふことは何にもないんだ。』

『それやあまあ結構でござりやすあー』

それさう婆さんは何にも言はなかつたので、シヨはちつと婆さんの仕事をしてゐる様を眺めてゐた。曲つた、てこぼした、うみざり蟹の爪のやうに硬ばつた指が、まるでピンセット見たいな工合に、手桶の中に入つてゐる馬鈴薯を掴み出すと、別の手に持つてゐる古びたナイフで手早くくるくると剝いて、細長い皮の片を切つて捨て、は、其の出来上がった馬鈴薯を水の中へ投げ込んだ。三羽のづうくしい鶏が交るく、婆さんの前掛の中へ飛び込んで、剝いた皮切れを拾ふと、それを嘴にくはへたなりて脚のつゞく限り急いで逃げて行つた。

シヨは舌の先に何か取ることの出来ぬものがついてゐるやうで、間が悪るやうな、落付かないやうな顔をしてゐた。とう／＼彼は出し抜けに言ひ

出した。

『なあ、お婆さん——』

『へえ、何てすい？』

『お前さんは何うしても此處の地面を賣らないかね？』

『さうだともね。あんたもさつぱりと諦めるがえ。だ。幾度び言つても同じこんだて、二度とまたその事は言つて貰ひますべえ。』

『それやあいゝとも。だが、物は相談だが、實は私達二人に大變都合のいゝ約定を思ひ付いたんだかね。』

『何ういふ事てすい？』

『お前さんは此處にゐるんだ。それを私に賣るには賣つても矢つ張り持つてはゐるんだ。解らないかね？ ぢやあいゝかね、私が今詳しく話をする

からよくお聞き。』

婆さんは馬鈴薯の皮を剥くのを止めて、藪のやうな眉毛の下からしげしげと亭主の顔を見入つた。亭主は言葉を續いだ。

『いゝかね、よくお聞き。月々私がお前さんに百五十フランづゝ上げようといふんだ。ね、解つたかい？ 月々私がお前さんに三十クラウンづゝ持つて来て上げようといふんだ。さうした所で、お前さんの生活はと云ふと、

ちつとも——ほんたうにちつとも變らせるやうなとはしないんだよ。お前さんは今と同じやうに矢つ張りお前さんの家を持つてゐるんだ。私のことなど氣に掛けてもよければ、また私に厄介になつてゐることも何にもないんだ。お前さんがしなければならぬことは、私から金を取ることだけさ。この約定は氣に入らんかね？』

彼は機嫌よく、と言つたよりは寧ろ情深さうに婆さんを見た。すると婆さんは疑はしげに、悪だくみがありはせぬかと云ふやうに、彼を見返した。そして言つた。

『私の方だけは尤もらしいけれど、それだと畑があんたのもんになりやすめえが。』

『その事は氣に掛けてい。』と亭主は言つた。『お前さんが生きてる内は何時までも此處にゐなさんだ。お前さんの家なんだ。たゞお前さんが死んだ後には、私に譲渡すといふ證文に、公證人の前て一判捺して置きさへすればいゝんだ。子供衆はなしさ、甥御や姪御はあつても、塵りばほども構ひなさらねえお前さんだ。氣に入らんかね？ 生きてる内は萬事この儘にして置いて、月々三十クラウンづゝ私がお前さんに上げるんだよ。お。』

前さんの方から云へば丸儲けさ。』

婆さんは呆れた、といふよりは寧ろ不安に思つたが、それでも同意しよるかといふ心が餘程動いたので、かう答へた。

『御相談に乗らんちふてはござりやせんが、よくまあ考へても見ねばなりやせんて、一週間経つたらまた来て下せえ。そんな時また話し合えの上で、私も確かな御返辭をいたしやせう。』

て、シコは皇帝に打勝つた國王のやうに嬉しがつて歸つて行つた。

マゴロアル婆さんは考深いたちだつたから、其の晩は少しも眠らなかつた。實際四日の間は兎つあいつの思案に暮らした。婆さんは此の申込の下に、何か自分に不利なことがあるんだといふことを、いはゞまあ嘆き出した。が月に三十クラウンのお金は何にもせぬのに、まるで天から降つて

いも来るやうに前垂の中でチャラ／＼するかと思ふと、欲しくて／＼堪らなかつた。

婆さんは公證人の所へ行つて其の事を話して見た。公證人はシヨの申込を承諾するがいと勧めたが、金は三十クラウンの代りに五十クラウン要求せねばいけないと言つた。それは、畑の直段がどんなに安く見積つても、六萬フランのものはあるからといふのであつた。

『もしも前さんがこれから十五年間生かるとしても、』と彼は言つた。『それでさへ、向うては唯だ四萬五千フランだけしか拂つたことにはならないんだからね。』

婆さんは月に五十クラウン取ることが出来ると思つて、嬉しくて身震ひしたが、何か悪たくみがあるのではないかとやはり疑つてゐたから、中々

歸らうといふ氣にはなれないで、長い間公證人の所におて色んなことを根掘り葉掘り訊き正した。が、とう／＼證文を作ることに極めて了ふと、新しい林檎酒を四本も飲んだやうに、ふら／＼した頭で家に歸つた。

シヨが二度目に答を聞きに来た時は、婆さんの方が説き落す地位に立つて、彼の申込に應ずる決心はまだ附き兼ねてゐるといつた。が、心の中では、もし亭主が五十クラウン出すことを得心しなかつたらと、絶えずそればかりを苦にしてゐた。が、とう／＼亭主が一途にせがみ出したのを見て、此處ぞと自分が畑に對して持つてゐる望みをこれ／＼だと言ひ出した。

亭主は呆れた、がつかりした顔をして、拒絶した。

すると、婆さんは亭主に信じさせようとして、自分がこれから先き生きてられる壽命のことを話し出した。

『わしはへえ、確かな所が、この先五六十年より長かあ生きさめえと思ひやすよ。もう彼れ是れ七十三だて、年から考えて見ても弱つてゐやすし。こなひだの晩もわしやあ死ぬかと思つたくれえて、やつとこさて床に這ひ込ひことが出来やした。』

併し、シコは騙されはしなかつた。

『そんなことを言つたつて、おばあさん、お前さんはお寺の塔のやうに丈夫ぢやアないか。百までは大丈夫生きるよ。ひよつとすると、私の方が先に土の下にならうも知れん。』

その日は一日金の論判に費されたが、婆さんは一歩も譲らうとしなかつた。て、宿屋の亭主は五十クラウン與ることを承諾した。すると、婆さんはなほ其の上に、手付を十クラウン貰ひたいと言ひ張つた。

三年経つたが、婆さんは一日も年を取つたやうには見えなかつた。シコは絶望して了つた。彼にはもう五十年間も定め金の支拂つて来たやうに思はれて、騙された、食はされた、自分はあちぶれて了ふといふやうな気がされた。彼はのべつに婆さんを見に行つた。それは丁度、人が七月の收穫が始まりさうになつてゐる時に行くやうな鹽梅式だつた。婆さんはいつもこすい目付をして彼に會つた。巧く一杯食はしたのを自分で楽しんでゐるとも思へば思へぬことはなかつた。彼は婆さんの如何にも丈夫で元氣さうなのを見ると、ぢきにまた馬車に乗つて、陰るやうに獨り言を云つた。

『何時迄もくたばらねえか？ 老いばれ婆あ。』

彼はどうしてよいかを知らなかつたので、婆さんを見さへすると絞め殺

したいやうな氣持がした。残忍な、こすい考から生じた憎悪を、物を盗まれた百姓が持つやうな憎悪を抱いて、婆さんに暇をやる手段を色々と考えた。

ある日彼はまたやつて来た。初めて契約を申込んだ時のやうに採手しながら、暫く氣輕にしやべつてゐたが、其の後で、ふとかう言つた。

『何てお前さんは、エブル非イユに來なざる時に、私ん所へ來て食事をなさらないんだね？ 世間ぢやあその事を何のかのと取沙汰して、何だか私達の間柄が丸くないやうにも言ふてね、私はそれが氣になつてならない。お前さんも知つてる通り、よしんばお前さんが來た所で、私が食事の代を取らうとは思つてもゐないんだから、一文だつてお前さんに散財をかける譯ぢやアなしさ。ね、何時でもお前さんの來たい時にお出てなさい。私あ

喜んでお待ちするから。』

マグロアル婆さんは二度と勸められるに及ばなかつた。一日置いて次ぎの日は丁度市日だつたので、兎も角もと、馬車を内の者に驅らして町へ出掛けて行つた。そして何の躊躇もなく馬車をシコの厩に入れて、約束の食事を求めに入つて行つた。

亭主は喜んだ。そして婆さんを貴夫人のやうに持てなして、焼いた鶏の肉や、黒ブディングや、羊の脚や、燻肉とキャベツやなどを御馳走した。けれども、婆さんは殆ど何にも食べなかつた。一體ふだんから小食の方で、大抵少しのスウブと一かけのパンとだけ暮らしてゐた。

シコは當てが外れたので、もつと食へるやうにと勸めたが、婆さんは辭退した。それに何にも飲まず、コオヒイまでも辭退したので、亭主は訊い

た。

『でも屹度、ブランディカリクウル酒なら、ちつと位上がるだらう？』
『へえ、それだとまあ、ちつとはいけんでもござりやせん。』
すると、亭主は聲高に言つた。

『ロザリイ、飛切のブランを持つといて、——別製だよ——知つてるかい。』
召使は葡萄の葉のベエバアで飾られた長い壺を持つて来て、それを二つのリクウル酒の盃に注いだ。

『ぢやあまあ試つて御覽。ごく上等なんだから。』

婆さんはなるべく長く其の樂みを續かせようと、ゆつくり嘗めるやうにして少しづつそれを飲んだ。そして盃が空になつた時に、なるべく長く其の樂みを續かせようとするやうに最後の滴を味ひながら、言つた。

『ふんたうに、これは上等でござりやす！』

その言葉がまだ終らぬ前に、シヨは婆さんの盃に今一杯ついだ。婆さんは辭退しようとしたがもう遅かつたので、それをも初めと同じやうにごく少しづつ飲んだ。すると亭主は三杯目を勧めた。婆さんは辭退したが亭主は強ひた。

『なあにミルクのやうに甘いんだから。私なんざあ十杯も十二杯も飲むが別に何ラツてこともありません。まるで砂糖のやうに下つちまッて、頭にはちツとも來ないんだ。舌の上でみんな蒸發して了ふらしい。身體の爲めにもごくいゝんだから、いくら飲んだつて大丈夫さ。』

婆さんも本當は欲しかつたのだから、手に取つたが、併し半分ほど飲み残した。

するとシコは、太ッ腹を見せて、言つた。

『かう見た所が、大變お前さんの氣に入つたやうだから、小さい樽に一つ差上げよう。これもやつぱりお前さんと私との仲のいゝ證據なんだ。』

で、婆さんはほろ酔ひ機嫌になつて、土産に酒を持って歸つた。

次ぎの日、宿屋の亭主は婆さんの庭まで乗つて來ると、馬車の中から鐵の籠の條つた小さい樽を取り出した。そして此の中に入つてゐるのも、やつぱり同じやうに味のよい品だから、一つ飲んで御覽と頻りに勧めた。そして、互に三四杯飲んだ時に、彼は歸りがけ乍ら言つた。

『いゝかい、お婆さん。それがすつかり無くなつても、まだ幾らもあるんだからね。遠慮することは無えぜ。なあに私の方は樽やしないから。早く無くなるやうだと私やア却つて嬉しいんだ。』

四日經つと彼はまたやつて來た。婆さんは戸の外でスウプに入れるパンを裂いてゐた。

彼は傍へ寄つて、顔を婆さんの顔に近づけて氣息を嗅いで見た。そしてアルコオルの臭ひのするのを知ると、嬉しい氣がした。

『別製を一杯振舞つて貰ひてえもんだね?』と彼は言つた。

そして二人は三杯づゝ飲んだ。

所が、直ぐと、マゴロアル婆さんは獨りて酔つ拂ふやうな癖になつたといふ噂が世間に傳はり出した。臺所にても、庭先にても、近邊の大道中にも寝て了つて、丸太のやうに家に運ばれたのも度々である。

シコはもう婆さんに近付かなかつた。そして人が婆さんの話をするといつても困つたやうな風をしてかう言つた。

「あの年で飲むやうになつたといふのは、大變氣の毒のことさ。だが、年を取つた人は治しやうがないんでね。つまり、生命を取られることになるだらうよ。」

三

それは確に生命を取られることだつた。婆さんは其の年の冬に死んだ。クリスマス頃に、雪の中に前後も知らず倒れて了つて、翌くる朝見付かつた時には死んでゐた。

て、シコは畑を受取りに来た時に、かう言つた。

「馬鹿な話さ。飲みさへしなければあ、また十年は丈夫で生きてゐられたのに。」

日曜日毎に、外出の許しが出る時直ぐ、二人の小さな兵士は急いで出掛けた。兵營を出ると直ぐに右に曲つて、まるで進軍でもあるかのやうに大股な駆足でクウルブゾアを通つて行つた。

やがて最後の人家を出抜けて了ふと、二人は歩調を緩めて、無趣味な埃だらけな道をベゾンの方へ歩いた。

二人共に小さくて痩せてゐた。それなのに、上衣が餘りに大きく餘りに長かつたので、身體はすつかり隠れたやうになつてゐた。袖は手の上に蔽ひ冠さつた。そして、大きな赤いズボンは、歩くによろ／＼せねばならぬ

ほどで、大變邪魔だつた。硬い高い胃の下からは、特色のない顔が——殆ど動物のやうな單純と、やさしい静かな青い目とを持つた單純な、憐れな、淺薄なブリタニイ生れの顔が見えてゐた。

かうして歩いてゐる間は二人は何にも話さないで、唯だ眞直ぐに進んで行つたが、銘々頭の中では同じことを考へてゐた。この考が話をする代りとなつた。それは、レ シヤムピウに近い小さな森の中に、丁度故郷を思ひ出させるやうな場所を見つけたので、其處で二人はまた楽しい思ひが出来るといふことであつた。

二人はコロンブからの道とシヤアツウからの道とが交叉してゐる所に於ける木立の下まで來ると、いつも重い胃を脱いで額を拭いた。ベンソン橋の上ではいつもセイヌ河を見る爲めに立止つて、二三分間は其處に、身體を曲

げて、欄干に寄りかゝつてゐるのを常とした。

時にはアルガンツウイユの大きな窪みに、小舟が白い傾いた帆を張つて疾走してゐるのを眺め入つてゐることもある。多分ブリタニイの流れのさまや、二人が住んでた所に近いザアンヌ港のさまや、モルピアン河を横ぎつて大海に出て行く漁舟のさまなどを思ひ出してゐるのであらう。

セイヌ河を向うに越えると、二人は食料を腸詰屋とパン屋と酒屋とから買った。一片の腸詰と、四スウのパンと、一リットルの『ブチブルウ』として其の食料は成立つてゐて、二人はそれを二人のハンケチに包んで持つた。で、ベンソンを後にしてからは、二人は静かに歩いて話し初めた。

二人の前には、荒れ果てた平野が所々にこんもりとした木立を持つて森まで續いてゐる。其の小さな森は、ケルマリザアンの森に似てゐるやうに二

人には見えた。穀物の畑と乾草の野とが兩側にあつて、狭い路は、若々しい緑の作物の中に見えなくなつてゐた。て、ジアン ケルドランはいつもルウル ガニイデに言つた。

『なあ、ブルニイヴォンの近邊に似てるぢやアねえか。』

『さうだなあ。本當に。』

二人は並んでぶらぶらと歩いた。心は漠然とした故郷の記憶や、目覚めた映像などで充ちてゐた。それは諸君が一ペニイで買ふ彩色畫みたいな幼稚なものだつた。二人は今野の一角、垣、沼地の一端、今は四辻、今は花崗石の十字架といふやうに、次ぎぐに髣髴と思ひ浮べながら歩いて行つた。そしてまた或る地界標や大きな石などの傍ではいつも立止つた。それが幾らかロオヌウヴンの供物壇のやうに見えたからである。

日曜日毎に、最初の木立の中に入ると、ルウル ガニイデはいつも管を、榛の樹の管を切つて、静かに其の皮を剥き初めた。そして其の間は國の者のことを考へた。ジアン ケルドランは食料を持つた。

時々ルウは人の名前を言ひ出したり、子供の時分のことを言ひ出したりした。それはほんの短い言葉だけれど、二人には長い考を起させた。すると彼等の故郷が、懐しい遠い故郷がだんぐに二人を取り返して、二人の想像力を捉へて、遠くから、形や、音や、よく知られてゐる景色や、匂ひ潮風の吹いてゐる緑の土地の匂ひやを二人に送つて來た。

もうバリの廐の蒸れる臭ひは——そして近郊の土地が肥えて行く臭ひはすつかり消えて了つて、大海の潮風が引裂いて運んで來るエニシダの花の香りが匂つて來た。そして、堤の上に見えるボオトの帆は、自分達の故

郷の家から海の直き端まで廣がつてゐる大きな平野を越えて見られる沿岸
航海船の白い翼のやうに見えた。

二人は静かに歩いた。ルウル ガニイデとジアン ケルドランとは、
甘い憂鬱と、檻の獸が自由を思ひ出してゐるやうなぐづぐづした不斷の悲哀
とに捉はれてゐて、満足なやうな悲しいやうな心持であつた。

ルウが丁度其の細い棒の皮を剥いて了つた時分に、二人は日曜日毎に朝
飯を食べる森の隅に着いた。先づ藪の中に隠して置いた二つの煉瓦を取り
出して、小枝で少しの火を作つて、その上で、鴈詰を銃劍の尖へ挿して
焙つた。

パンを最後の屑まで食べ、酒を最後の雫まで飲んで、朝飯が済んで了ふ
と、二人は草の上に並んで腰を卸したまゝ、何にも言葉をかはさずに目を

遠方に遣つてゐた。眼瞼は重く垂れ、指は法會の時のやうに組み合せ、赤
い脚は野の芥子の傍へ投げ出してゐた。そして、胃の革と扣鈕の眞鍮とが
照り付ける太陽にぎら／＼輝いてゐたので、二人の頭の上を囀りながら舞
つてゐた雲雀は歌をなかばて止めて了つた。

午近くなると、二人は時々目をベゾンの村の方へ向け初めた。それは娘
の牛飼がやつて来るからであつた。娘は自分の牛の乳を搾つたり、牧場を
變へたりする爲めに日曜日毎に二人の傍を通つて行つた——それは此のあ
たりで、草を食ひに牛小屋からいつも出て行く唯だ一頭の牝牛であつた。
それは少し離れて、森の傍の狭い野原に放されてゐた。

二人は直きに其の娘を、眼界の中にある一人きりの人間を、認めた。そ
して、錫の牛乳桶が太陽の光線を受けてきら／＼と輝くのを見ると嬉しく

思つた。二人は娘のことについて話したことはなかつた。二人とも娘を見るのが、何故かは解らぬが只だ嬉しかつた。

娘は髪の毛の赤い、日に焼けた、バリ近在の丈夫な産物といはれる、身体からだの大きい、力の強い下等な女であつた。

ある時、いつもの場所に二人が腰を卸してゐるのを見て、娘は聲を掛け

た。
『お早う。あんた達や何時でも此處にゐるねえ。さうぢやあない？』
ルウル ガニイデの方がいくらかづらぐらしかつたので、吃りながら

言つた。

『さうだよ、休みに来るんさ。』

それきりだつた。が次ぎの日曜日には、娘は二人を見るとにと笑つた。

女性の聰しさて二人が恥かしかつてゐたことを十分によく知つてゐたので、
氣まりを悪がらせまいとするやうににと笑つた。そして娘は訊いた。

『あんた達や其處で何をしてゐるんだね？ 草の大きくなるのを見ててもゐるんかね？』

ルウはこれを聞くと嬉しくなつて一緒に笑つた。

『まあ、そんなもんさ。』

『随分氣の長い話だねえ。』と娘は言つた。

ルウはやつぱり笑ひ乍ら答へた。

『さうさ。氣の長い話さ。』

娘は行つて了つた。が牛乳桶に一ばい牛乳を入れて歸つて來ると、また二人の前に立止つて言つた。

「一ばい飲まんかね？ 故郷の味がするだよ。」

娘は自分が故郷を遠く離れてゐたので、二人もまた自分と同じ百姓の出だからといふ自然に出た感情で、かう言つて、其の心を動かした。

二人は共に動かされた。やがてやつとのこととて、娘は二人が酒を入れて来たガラス壺の口から牛乳を中へ移し込んだ。て、ルウが初めに、もしや半分以上飲みはしないかとちよい／＼止めては見い／＼少しづつ飲んだ。そして後に壺をジアンに渡した。

娘は両手を臂に當て、桶は足元の地べたに置いて、自分のしたことを嬉しく思ひながら二人の前に突立つてゐた。やがて娘は、

「ちやあ、さいなら！ また今度の日曜に！」と聲高に言ひながら、別れ

て行つた。

て、二人は全く娘が見えなくなるまで、ちつと目を据ゑて其の背の高い後姿を見送つてゐた。それはだん／＼小さく／＼なつて、果ては野の緑の中に沈んで行くやうになつて消えて了つた。

二人が次ぎの週に兵營を出掛けようとしてゐた時、ジアンはルウに言つた。

『あの女に何かいゝ物を買つてツちやアどうだ？』

二人は牛飼の娘の氣に入りさうな物を選ぶ段になつて非常に困つた。ルウは小さい年の臍腑が一番よからうといふ意見であつたが、ジアンは自分が甘いものが好きなものだから、砂糖漬の方がいゝと言つた。ふと、ジアンが自分の選んだものに熱心になつたので、二人は雜貨店でキャンデイの

白いのと赤いのを二スウだけ買った。

二人はいつものよりは急いで朝食を食べて、氣を揉み乍ら待つてゐた。シアンが初めに見付けた。

『あすこへ来たぞ！』と彼は叫んだ。

と、ルウが言葉を合せた。

『さうだ。あすこへ来た。』

まだ餘程離れてゐるうちから、娘は二人の方を見て笑ひかけた。やがて娘は叫んだ。

『お變りもなかつたかね？』

すると、二人も異口同音に尋ねた。

『あなたも變りがなかつた？』

やがて娘は、二人が面白がりさうな色んなことを——天氣のことや、收穫のことや、自分の主人のことなどをそれからそれへと二人に話した。

二人はキャンデイを出し兼ねてぐづくしてゐた。で、それがシアンのポケットの中でそろ／＼溶け初めた。

とう／＼ルウは思ひ切つて、謔くやうに言つた。

『あなたに上げるツて持つて来たものがあるんだよ。』

娘は訊いた。

『何だね？ お見せよ！』

すると、シアンは耳の根まで赤くなつて、小さな紙に包んだ澤山のころ／＼した物を出して、それを擲げた。

娘は小さなボン／＼を食へ初めた。それが一方の頬から別の頬へ轉がつ

て行つて、其處をちよつと丸く膨ませた。二人の兵士は娘の前に腰を卸して感心したやうな嬉しいやうな顔をしてぢつと娘を見てゐた。やがて娘は牛乳を搾りに行つたが、歸つて來ると、またそれを少し二人に呉れた。

二人は其の一週間はまるで娘のことを思つてゐた。幾度か二人で娘のことを話し合ひもした。次ぎの日曜日には、娘は二人と一緒に坐つてやゝ長い間話をした。三人は並んで腰を卸して、遠くの方に眼を遣つて兩手で膝を緊と抱きながら、小さな出来事や、自分達が生れた村の些細な生活のさまたちなどを語り合つた。牛は向うの方で、乳搾りの女が途中で留つてゐるのを見て、其の垂れ下つた鼻のついた重たい頭を娘の方に伸ばして、長くもうと娘を呼ぶやうに鳴いた。

間もなく娘は、二人と一緒に少しばかりのパンを食べたり、一口の酒を飲んだりするやうになつた。やがて梅の季節が來たので、娘はしばしば梅をポケットに入れて二人に持つても來た。娘の一緒にゐることが二人の小さなブリタニー生れの兵士の智慧を研いて、二人はまるで二羽の鳥のやうに囀つた。

處が、ある火曜日のことである。ルウル ガニイデは暇を貰つて——今まで決してなかつた事だ——其の晩は十時まで歸らなかつた。ジアンは友達がそんな風にして出て行く理由をいろいろに考へて氣が落ち着かなかつた。

其の次ぎの木曜日にも、ルウは同じ寢床に寝る仲間から十スウを借りると、また許しを得て數時間の間兵營を出て行つた。て、いつもの日曜日の

散歩にジアンと一緒に掛けた時は、ルウの様子が頗る變で、まるで落着きがなく、まるで變つてゐた。ケルドランは其の譯が分らなかつたが、併し漠然とある事を、まさかとは思ひながらも疑つてゐた。

二人はいつもの休み場所に着くまで互に一言も口を利かなかつた。休み場所はいつも二人が同じ場所に坐るので草は全く擦り耗らされてゐた。二人はゆつくりと朝飯を食べた。が、二人共に腹は減つてゐなかつた。

向うに娘が見えた。いつもの日曜日やうに二人は其の近づいて來るのを見守つてゐた。娘が直ぐ傍まで來ると、ルウは立つて二足ばかり前へ進んだ。娘は牛乳桶を地上に置いて彼にキスした。兩腕を男の頸に掛けて、ジアンには氣も懸けずに、其處にゐることを思ひ出しもせずに、見さへもせずに熱心にキスした。

とジアンは、哀れなジアンは、失望して、譯の分らぬほどに失望して、其處に坐つた。魂は全く沈んで了ひ、胸は破れるやうだつたが、でも自分には少しも譯が分らなかつた。やがて娘はルウの傍に腰を卸して、二人はしやべり初めた。

ジアンは二人を見もしなかつた。彼は今始めて友達が前週に二度まで出掛けて行つた譯が分つたので、胸の中は、燃えるやうな悲哀を、不信といふことで惹起される裂かれたやうな感じのする一種の重傷を覺えた。

ルウと娘とは牝牛の位地を變へようと一緒に行つた。ジアンは二人の後を目で追つた。彼は二人の並んで行くのを見た。友達の赤いズボンが路の上にはッとした斑點となつてゐた。ルウは槌を拾ひ上げて牛を繋ぐ杓を打ち込んだ。

娘が屈んで乳を搾つてゐる時、ルツは何氣なしに牝牛の尖つた背骨を手で撫でてゐた。やがて二人は牛乳桶を草の上に置いて森の中へ深く這入つて行つた。

ジャンは二人が這入つて行つた後に、唯だ樹の葉の壁のやうになつてゐるのを見た。と、彼は非常に心が苦しくなつて、もし立ち上らうとしたならば屹度倒れたらうと思はれるほどだつた。呆れたのと苦しいのとで氣拔けのやうになつて、單純ではあつたが深い苦痛を胸に抱き乍ら、身動きもせず坐つてゐた。彼は聲を擧げて泣きたいと思つた。逃げ出したいと思つた。身を隠して、もう決して何人をも見まいと思つた。
直ちに彼は二人が林の中から出て来るのを見た。二人は村などで約束の出来た者達がするやうに互に手を執り合つてそろ／＼と歸つて來た。手桶

を持つて來たのはルツだつた。

二人は別れる前にまたキスを交はした。そして娘はジャンに、親しげに『さよなら』と言つて、意味ありさうな笑を残して行つて了つた。今日ももう牛乳を彼に呉れようと思はなかつた。

二人の小さな兵士はいつものやうに身動きもせずに、黙つて靜かに、並んで坐つた。二人の落着いた顔には二人の心を苦しめたことが少しも現はれてゐなかつた。日は二人の上に落ちた。時々牝牛が遠くから二人の方を見ながらもうと鳴いた。

いつもの時間に二人は立つて歸り初めた。ルツは管を切つた。ジャンは空壺を持つてゐたがベズンで酒屋にそれを返した。そこで二人は急いで橋の上まで來ると、いつの日曜日にもするやうに數分間橋の中程に立止つて、

水の流れるのを見守つてゐた。

ジアンは鐵の欄干に凭つてゐたが、だん／＼上に乗れ出して、何か流の中に目に着いたものゝあるのを見入るかのやうであつた。

ルウは言つた。

『水でも飲みたいのか？』

この最後の言葉が切れたと思ふと、ジアンの頭は身體より重くなつて、脚が空中に圓を描くと、半分青くて半分赤い小さな兵士は一つの塊になつて落ちて、水を打つて見えなくなつた。

ルウは、舌が苦しみの餘りに麻痺して了つて、叫ぼうとしたが聲が出なかつた。と、少し下つた所で、彼はふと何かの動くのを見た。すると、友達達の頭が水の上に見えて、直ちに洗んだ。今少し下つた所で、彼はまた手

が、一本の手が流から出て、そして見えなくなつたのを見た。それぎりだつた。

探しに出た船頭は、其の日は死體を見出さなかつた。

ルウは駆足で、一人て兵營に向つた。心は絶望で満ちてゐた。彼は目に一ばい涙を溜めて、噎れた聲で、度々鼻をかみながら其の變事を語つた。

『奴あ乗り出して——奴あ——奴あ乗り出して——こんなに——こんなにから頭を繖筋斗をするほどに、そして——そして——から奴あ落ちた——奴あ落ちた——』

胸が迫つてこれきり口が利けなかつた。それと知つてさへゐたならば！

悲れりゆりゆりしき由悲れり
能へ死にけりしき由悲れり
えりハツキン——

大佐の話

1/10

『正直な話が、』とラポルト大佐は口を切つた。『吾輩は年を取るし、痛風には罹るして、脚といへば二本の棒のやうに硬くなつてゐるんだが、でも若し美しい女が吾輩に針のめどを通れといふやうなことがあるとすれば、吾輩は誓つて其の中へ飛び込んで見せる、丁度ちやりが輪を潜るやうな鹽梅式に。何れ吾輩はそんなことと死ぬだらうが、それといふのがさういふ血が身内を流れてゐるからさ。吾輩は年を取つた色男さ、舊式な色男さ。だから女の姿を、美しい女の姿を見さへすれば足の指の先まで顔へやがる。さうら！』

M. and J. m.

「所で、フランスでは、吾々はみんな似たり寄つたりさ。吾々は今ぢやあ
騎士、さうさ、戀と好運との騎士なんだが、神が廢されなかつた以前にや
あ、本當に其の親兵であつたんだ。併し、何人だつて吾々の胸から女を取
り去ることは決して出来るものでない。女は現在其處に住んでゐるばかり
でなく、將來も其處に住んでゐるだらう。吾々は現在女を愛するばかりで
なく、將來も引續いて愛するだらう。そして女の爲めならどんな種類の戯
れでもやるだらう。苟くもフランスといふ名がヨオロッパの地圖の上にあ
らん限りは、いやさ、よしんばフランスといふ名が地圖から抹殺されること
があらうとも、フランス人が此の世に残されてゐるであらう限りは。
「吾輩は女のゐる前てなら、美しい女のゐる前てなら、どんな事でも出来
るやうな氣がするのだ。誓つていふが吾輩の心の底まで見抜くやうな女の

目付を、あの、それ、諸君の血を燃え立たせるやうな惱ましげな目付さ、
あれを吾輩が感ずる時は、吾輩にはどんな事でも出来るんだ。決闘もすれ
ば、喧嘩も買ふ。家財を打ち毀しもする。苟くも吾輩が男の中で、一番強
い、一番勇敢な、一番大膽な、一番其の女を大事にする者だといふことを
示し得ることなら、どんな事でもする。

「併し、何も吾輩が其の唯一の人ではないんだ——斷じて無いんだ。フラ
ンスの軍隊全體が吾輩と同じである、といふことを吾輩は誓つていふ。下
は普通の兵卒から上は將軍に至るまで、其の場に女がゐるさへすれば、美し
い女がゐるさへすれば、いゝかね、吾々はすべて進むんだ。終局まで進むん
だ。ジャンダアクがかつて何ういふことを吾々にさせたかを忘れはしま
い——さあ、吾輩は賭をしてもいゝ、もしセダンの役にだな、美しい女が

軍隊の指揮をしてさへ居つたならば、よしんば大將のマクマホンが負傷してゐてもさ、吾々は、誓つて、プロシア軍の戦線を破つて、敵の銃て一杯飲めたに違ひなかつたのだ。

「バリて要求された者はトロシエ將軍ではなくつて女神のジエヌヴェイエツであつたんだ。所で吾輩は、吾々が女のある前なら、どんなことでもやり得るやうになるといふことを證明するに足る戦争の小さい逸話を一つ思ひ出した。

「其の時吾輩は大尉で、唯だの大尉で、斥候の一枝隊を率ゐてプロシア軍の一ぱい入つてゐる地方を通つて退軍しつゝあつたんだ。吾々は包圍はされる、追窮はされる、足は疲れる、といふ譯で、もう疲労と飢餓とでなからは死にかけてゐたんだ。しかも次ぎの日までに、是非共バル・スル・タン

に達せねばならなかつた。さうでないと、本隊との聯絡を全く絶たれて、

塵にされねばならなかつたらう。吾輩はどうしたらさういふ遠い所が逃げおぼされるかを知らなかつた。しかも、其の晩のうちに、十リイグ(一リは凡そ我が一里十五町)は行かねばならなかつた。雪の中を、空さツ腹で、十リイグをさ。吾輩は腹の中で考へたな。

「迎もこれは駄目だ。可哀相に部下の奴等にやあ、迎もそんなことは出来ようない。」と。

「吾々は前の日から何にも食はなかつたんだ。そして其の日は一日、納屋の中で、少しでも寒さを感じないやうにしようといふので、身體をぐツとくツつけ合せて隠れてゐたんだ。吾々は口を利くことは勿論、身動きすらしなかつた。そして、丁度諸君が疲れてへとくになつた時に眠るやうに、

半死半生の體で眠つてゐたんだ。

三〇

「五時になつても暗かつたが、闇は雪明りて青ざめてゐた。て、吾輩は部下の兵を揺り起した。中には起きようとしぬ奴もあつた。實際奴等は、みんな動くことも真直ぐに立つてゐることも殆ど出来なかつたのだ。言つて見れば、奴等の關節が寒氣と動火の缺乏とで硬くなつて了つたんだな。」

「吾々の前には、平らな、茫漠とした國の大きな曠がりがあつた。雪はまだカアテンのやうに、大きな、白い片となつて降り頻つて、ありとあらゆるものを、重たい、厚い、凍つたマントの下に、氷の寝蒲團の下に隠してゐた。誰でもこれが萬事の終だと思つたらう。」

「さあ、さあ、出發しよう。」

「兵はみんな厚い、白い埃の落ちて來るのをちツと眺めて、かう考へてゐるやうだつた。」もうこれで十分だ。此處で死んだ方がいくらましか知れな

い！」と。そこで、吾輩は拳銃を取り出してかう言つた。

「真先きに尻込みする奴を打つぞ」ツて。そんなことで一同出發はしたが、いや遅いこと、まるでもう、足なんかちつとも役に立たなくなつた人達のやうな風なんだ。吾輩は其の内の四人を斥候として三百ヤアド先きにやつて、其の外の者は、全く氣儘に、何の規律もなく唯だ歩かせて、ばらばらに附いて來させた。殿には一番強い兵を置いて、無性な奴の歩調を早めさせる爲めに、銃劍の尖て後から追立てさせた。

「雪は吾々を生き埋めにしようとしてゐるものやうに見えた。軍帽や外套の上には、解けずに白く積つて、吾々を亡靈のやうに、草臥れ切つてへとくになつてゐる兵達を幽霊のやうにした。て、吾輩は心の中で思つたな。

三一

「奇蹟でも起つたら知らぬこと、逆もこれやあ助かりッこはありはしな
し」と。

「時々吾々は三四分間位立止つて、後れて来る兵を待たねばならなかつた。聞えるものといつては、唯だ雪の降る音ばかりで、それがさら／＼と觸れ合つて落ちる時に、微かな、殆ど有るか無いかと思はれるやうな音を立てる外には何も聞えるものはなかつた。中には身震ひをした奴も幾らかはあつたが、大抵の奴は動きもしなかつた。そこで、吾輩はまた出發の命令を下した。一同旋銃を肩にして、たど／＼しい足取でまた出發した。と、其の時、不意に斥候が歸つて來た。何事か奴等を驚かしたことがあつたんだ。何でも前方に當つて、聲のするのが聞えたといふんだ。そこで、吾輩は六人の兵に一人の軍曹を附けて見せにやつて、待つてゐた。」

「忽ち耳を貫くやうな叫び聲が、女の叫び聲が、雪の重々しい沈黙を劈いた。そして、三四分間位も経つと、奴等は二人の捕虜を、一人の老人と一人の娘とを連れて歸つて來た。て、吾輩は二人の者に低い聲で聞いて見た。二人は前の日の夕方、自分達の家を占領した上に、酒に酔つぱらつてゐるプロシア人の手から逃げて來たんだ。親爺は娘の身の上が案じられたので、召使達にさへ知らさずに、闇に乗じてこっそり逃げ出して來たんだ。吾輩には彼等が上流社會の者だといふことは一目で分つた。が、どの道外に仕様がなかつたので、吾々と一緒に來るやうにと二人に勧めた。そこで、吾々は一緒に連れ立つて出發した。親爺が道を知つてゐたので、道案内の役を務めて呉れた。」

「折から雪の降るのが止むと星が見えて、寒さは一入強くなつた。娘は父

親の腕に身を凭せるやうにして、疲れた足を引き／＼歩いてゐたが、幾度かつぶやいた。

「私もう、足にちつとも性がありませんわ」と。その可憐な小さい女が、雪の中をそんな風にして身を曳きずつて行くのを見ると、いや實際の話が、吾輩の方が娘自身よりは一層苦しかった。所が、不意に娘は足を止めて、そして言つた。

「父様、私すつかり草臥れちやつて、もうちつとも歩けませんわ。」

「老人は娘を背にかけて行かうとして見たが、どうして持ち上げることすら出来なかつた。で、娘は地上にくづをれて深い溜息をついた。吾々はみんな娘のまはりに集つた。吾輩の身になつて見れば、どうしてよいかは知らないと云へ、この儘、親爺と娘とを捨て、行かうといふ決心は猶更ら

付き兼ねたので、獨りて地國太を踏んでゐた。と不意に一人の兵が、バリつ見て、「實行家」ツて渾名で通つてゐる奴が言つた。

「さあよ諸君、みんなてお嬢さんを擔つて行かにやあならんど。てなきやあ、吾々フランス人の名折になる！」と。

「吾輩は心底から嬉しくて堪らなかつた。で、かう言つた。」それあ至極いことだ。俺も自分の分だけは擔いてやる。」つてな。

「左の方に、闇を通して、小さな森の小立が朦朧と見えてゐた。と、五六人の兵が其の中へ這入つて行つて、直ぐに小枝の束で編んだ昇床を持つて歸つて來た。

「誰か外套を貸す奴はないか？ 美しい嬢さんの役に立つんだが。」と實行家が言ふと、十着の外套が奴の手に投げられた。忽ち娘はそれらの外套の

中に暖かに氣持よく寐かされて、六人の肩の上に昇き上げられた。吾輩は右の方の先頭に身を置いたが、自分が荷を擔いでゐるといふことが非常に嬉しかつた。

「吾々は今迄より一倍の元氣で、さうさな、まるで一杯機嫌とても言つたやうな調子で出發した。そして常談さへ少しは出るやうになつた。フランス人にえれさをかけるには女さへあれやあ全く澤山だ、なあ諸君。兵達は興奮して暖かになつたので、列をもほゞ組み直した。年を取つた義勇兵が一人、一番先に疲れた奴と代らうといふので、自分の番になるのを待ちながら、昇床に附いて來てゐたが、其奴が側にもた一人の仲間に向つて、わざと吾輩にも聞える位に聲を高くして、かう言ふんだ。

「俺あもう若えもんぢやあねえが、併しなんだなあ、全體世の中に、女ッてももの位、頭のとツペンから足の先まで變な氣にさせるものあ外にねえなあ！」

「吾々は、殆ど立止りもせんで、朝の三時まで進んで行つた。と其の時不意に斥候がまた歸つて來た。直ぐに一同は雪の上に横はつたので、全枝隊は唯だぼんやりとした影が地上に落ちたとしきや見えなかつた。で、吾輩は低い聲で命令を傳へたり、旋條銃の打金の粗い金屬の音を聞いたりしてゐた。其處に、平原の真中に、何やら分らぬ怪しげな物が動き廻つてゐた。それは何かかう、走り廻つてゐる大きな動物のやうに思はれるもので、蛇のやうにぐつと伸びたり、又とぐるを巻くやうに一緒に固まつたり、かと思ふと、不意に急いで右へ行つたり左へ行つたり、端と立止つてはまた進んだりしてゐるんだ。併し、直きに其のうろくしてゐる物の姿が近づい

て来たので、見ると十二騎の槍騎兵なんだ。一騎の後に一騎といふ風に列を作つて、迷つた道を見附けようとしてゐたんだ。

「するうち、彼奴等がぐつと近くに來たので、吾輩は馬の喘いでゐるのや、劍のがちや／＼鳴る音や、鞍の軋む音などを聞くことが出來た。で、「打てッー」と叫んだ——

「五十の銃聲が夜の静肅を破つた。ついで五發の音響が響いた後で、最後に唯だ一發聞えたつて。煙がすつかり消え去つた時に、見ると、十二人の人間と九頭の馬とが僵れてゐた。三頭の動物は怒り狂つた足を舉げてまつしぐらに駆けてゐた。殊に其の内の一頭は、乗つてた奴の身體を後に引きずつてゐた。足が燈に引ツかゝつてゐたので、其奴の身體は見るも恐ろしいやうな恰好で地から跳ね反つてゐた。

「吾輩の後にゐた兵の一人は粗い聲で笑つて言つた。「また幾人か後家が出て來たぞ！」ツて。

「多分其の兵は結婚してゐたんだな。すると又一人の兵が附け加へた。「それがちよつとの間だつたなあ！」

「と、頭が昇床から擡げられて、

「何うしたんですの？」と娘が言つた。「戦争をしましたの？」

「何でもないんだよ、嬢さん。」と吾輩は答へた。「唯ね今一ダズンのプロシヤ人に暇をやつた所でさあ！」

「まあ可哀相な——」と娘は言つたつてが、寒かつたので、直ちにまた外套の下に見えなくなつた。で、吾々はまた更に出發した。吾々は長い間行進した。するととう／＼空が白み初めた。雪は一面に清く、さら／＼と照り

輝くやうになつて、東の空には薔薇色が見え出した。不意に向うの方で叫ぶ聲音がした。

「誰だ、其處へ行くのは？」

「全枝隊は確と立止つた。て、吾輩は吾々が誰であるかを名告らうとして進み出た。吾々はフランス軍の前哨線に達したのだ。て、吾輩の部下が前哨の前に縦列を組んで進んだ時に、司令官は馬上で、吾輩の報告する事の顛末を聞いてゐたが、昇床が直ぐ傍を通るのを見ると、響のある聲で聞いた。

「何だ、其處へ持つて行くのは？」

「と、直ぐに明色な髪の毛で蔽はれた小さな頭が、亂れた髪の毛のまゝで現はれて、笑ひながら答へた。

「私ですの。」

「これを聞くと、兵は心からの笑聲を擧げた。全く吾々は心が軽くなるやうな氣がしたのだ。と其の時昇床の傍を歩いてゐた實行家が、自分の軍帽を振ると聲を張り上げて言つた。

「フランス萬歳！」と、吾輩は實際感動させられたな。吾輩は其れが何故かといふ譯は知らない。たゞさう言つたのが美しい勇しいことだと思つたばかりなんだ。

「吾輩にはそれが、丁度フランス全體を救ひでもしたもののやうに、何かから、外の人達にはどうしても出来なかつた何事かを、單純な事ではあるが、眞に愛國的な何事かを成し遂げてしたものゝやうに思はれたのだな。吾輩が決して其の小さな顔を忘れることが出来ないのは、諸君にも分

るだらう。て若し、太鼓や、喇叭や、呼子やを廢して了ふといふことに就いて、吾輩の意見を述べねばならぬとすれば、吾輩は各聯隊に一人の美しい少女を置いて、それらのものに代らせることを提議しようと思ふ。いや、其の方が「マルセイユ」を奏するよりも一層好からうと思ふのだ。誓つて言ふが、さういふやうなマドンナを、生きたマドンナをさ、大佐の傍に置くのは即ち或る靈氣を軍隊に注ぎ込む所以なのだ。」

大佐は暫くの間黙つてゐたが、やがて堅く信ずるといふやうな面持をして、頭を動かしながら言葉をつけた。

「諸君、吾々は、女が非常に好きなんだ。吾々フランス人は！」

宿 屋

高いアルプの山の中には、小さな木造の宿屋が、白い峯々を横断してゐる。裸な岩勝ちの谷間に幾らも建てられてあるが、それらと同じやうに、シユワレンバツハの宿屋はゲンミイ山を越えようとする旅人に取つての避難所となつてゐる。

それは年に六ヶ月間開かれて、ジヤン ハウゼルの一家が住んでゐる。雪が降り初めて谷を埋め、ロオエツクへの下り道が通れなくなりさうになると、父親は、母親と娘と三人の息子とを連れて山を降つて、家は、年を取つた道案内のガスバルド ハリに、若い道案内のウルリッヒ クンジと

宿 屋

サムといふ大きな山育ちの犬とを附けて留守番をさせる。

二人の男と犬とは、目に入るものといつては唯だ、さら／＼と照り輝く
岩々に取り囲まれたバルムホルン山の廣大な白い傾斜の外には何物もない
雪の牢獄の中に、春が来るまで残つてゐる。雪は周圍に降り積つて、櫓ま
でも小屋を包み、果ては殆ど埋めて了ふ。て、彼等は閉ぢ込められ、押し
塞がれ、埋められてゐる。

冬が近づくに連れて、下りがだん／＼危険になり初めたので、ハウセル
の一家はいよいよロオエックへ歸るべき日となつた。荷を着けた三頭の騾
馬が、三人の息子に引かれて最初に出發した。次ぎに母親のジャンヌ、ハ
ウセルと娘のルイゼとが第四の騾馬に乗つて出掛けた。父親は其の後から、
下りの峠口まで家族を送りに立つた留守番の二人と連れ立つた。一行は先

づ小さな湖水の縁を通つた。それは宿屋の前に擴がつてゐる一團の岩の根
方にあつて、今は一面に氷が張り詰めてゐた。一行は次ぎに谷間に入つた。
兩側には雪に覆はれた岩々が聳え立つてゐた。

太陽の光線は白く輝いてゐるこの小さな凍つた荒地にさら／＼と射して、
冷たい眩しい炎焔で其れを照らしてゐた。生きた物といつては何一つ此の
小山の海の中に見えなかつた。この限りなき寂寥を動かすものは一物も無
く、奥深い沈黙を擾す物音は何もなかつた。

脊の高い、足の長いスキツル人である若い道案内のウルリッヒ、クン
ジは、次第に親爺のハウセルや年寄のガスバルドを後に残して、二人の女
を乗せて行く騾馬に追ひ付かうとした。娘は彼の近づいて来るのを、愁は
しげな眼を擧げて呼ばうとでもするやうに眺めた。彼女は年の若い、髪

毛の明色な田舎娘であつた。其の乳白の頬や、蒼白い髪の毛は、長く氷の中に住んでゐたので其の色を失つたやうに見えた。ウルリツヒは二人を乗せて行く動物に追付くと、手を鞆の上に置いて其の歩みを緩めた。母親のハウゼルは口を切つて、冬の間、彼の氣を附けねばならぬもろくの事を細かに數へて話し出した。年寄のハりは、すでに十四冬もシユワレンバッハの宿屋で雪の中に暮らしたのだが、ウルリツヒが其處で送らうとする冬はこれが初めてであつた。

ウルリツヒ クンジはぢつと耳を澄して聽いてゐたが、解つてゐるらしくはなかつた。眼は絶えず娘の方を見てゐた。始終、「はい、はい」と答へてはゐたが、考は全く別の事に向いてゐると見えて、其の沈んだ顔付は少しも動かなかつた。

彼等はドオプ湖に着いた。その廣い、凍つた湖の面はずつと谷の口まで續いてゐた。右の方には、ウイルドストルウベル山の上を高く流れてゐるレエメオン氷河の大きな堆石の上に、ドオベンホルン山の黒い頂が更に高く聳えて見えた。で、彼等がロオエックの降り口になつてゐるゲンミイ山の頸部に近づいた時に、バレイのアルプの大きな地平線は、ロオンの廣い、深い谷を隔てて、かツさりと目に入つた。

遠くの方には、平たいのや、尖つたのや、不揃ひな一群の白い山の峯が日に輝いてゐた。それは、頂が二つになつてゐるミスシャベル山や、ウエイスホルンの大群山や、どツしりとしたブルネツグホルン山や、人殺しと云はれるケルギン山の高く聳えた恐ろしい尖塔や、恐ろしい妖婦にも比すべきデント プランシユ山などであつた。

やがて下の方に、恐ろしい深淵の底のやうな所に、ロオエックが見えた。人家はまるで、一方はゲンミイ山の麓につゞき、一方は下の方ロオンの谷に開いてゐる大きな裂目の中に撒き散らされた砂粒のやうに見えた。驛馬は路の下り口に留つた。間断なくうねりくねつて、不思議に断えては續き、續いては断えてる路は、峻しい山腹を繞つて、殆ど目に入らぬほどに小さな麓の村まで續いてゐる。女達は雪の上に飛び降りた。二人の老人も一緒になつた。

『さあよ。』と父親のハッセルは言つた。『お別れだぞよ。ぢやあ來年まで達者であろよ。』

年寄のハッセルは答へた。

『ぢやあ來年まで。』

そして、二人は互に抱き合つた。次ぎに、母親のハッセルの番になつて、彼女は其の頬を向けた。て娘もまた其の通りにした。

ウルリツヒ クンジの番になつた時に、彼はルイゼの耳に囁いた。

『あすこの事を忘れてはいけませんよ。』
で、彼女は答へた。

『えい。』

低い聲だつたので、彼は其の言葉を聞きはしなかつたが、其の意味だけは察した。

『さあよ。左様ならだぞよ。』とジャン ハッセルは繰返した。『頬はぬやうにしろよ。』

そこで彼は二人の女の先に立つて下り初めた。三人の姿は路の最初の曲

り角で直さに見えなくなつた。で、二人の男はシユワレンバッハの宿屋の方へ歸りかけた。

二人は肩を並べて、話もせず静かに歩いた。別れが済んで、これから四五ヶ月の間は二人きりになるだらう。暫くすると、ガスバルド ハリは去年の冬籠の時の事を話し出した。去年はミカエル カノルと一緒にたつたが、彼はもう餘りに年が寄つたので、どんなことが長い冬籠の間に起らぬとも限らぬから今年に止めた。併し、別段退屈はしなかつた。たゞ大事なことは、初めに其の覺悟をしてゐること、さうさへすれば、終ひには氣を紛らす事や、勝負事や、時間を潰す手段などが色々見付けられる。

ウルリッヒ クンジは目を俯向けて地上を見ながら聞いてゐたが、胸の中では村の方へ下つて行つた人達のことを思つてゐた。二人は直さに宿屋

の見える所へ來た。宿屋はやつと目についた位に小さくて、雪の大波の裾の一つの黒點としか見えなかつた。二人が戸を明けた時に、大きな捲毛の犬のサムは、二人の周圍をはねまはつた。

『さあ、さあ。』と年寄のガスバルドは言つた。『もう女がゐねえから、俺達は自分で飯の支度をしなければならねえ。さあよ。馬鈴薯の皮を剝いて呉れる。』

そこで二人は木で造つた床几に腰を掛けて、パンをスープに入れ初めた。あくる朝は大變長いやうにクンジには思はれた。年寄のハリは爐傍で煙草ばかりふかしてゐたが、若者は窓から、雪に覆はれた向ひの山を眺めてゐた。午後になると、彼は外に出て、また昨日の道を歩き乍ら、二人の女を乗せて行つた騾馬の足跡を捜した。で、やがてゲンミイ山の頸部に行き

着くと、腹這ひになつてロオエツクの方を眺めた。

岩石の凹みにある村は、其の直ぐ近くまでは白い大きな塊が來てゐたが、併し、其の村を守る松林に支へられて、まだ雪に埋められてはゐなかつた。彼のある地點からは、低い人家がまるで大きな牧場の敷石のやうに見えた。ハウゼルの娘は今其處に、それらの灰色の家の一つに居るんだ。どれだらうか？ ウルリッヒ クンジのゐる所は餘りに遠く離れてゐたので、それらの家を別々に見分けることは出来なかつた。どんなに彼は、行ける所まで降りて行きたかつたことであらう！

所が、太陽がウイルドストルツベル山の高い頂の後に没したので、若者は小屋に歸つた。年寄のハリは矢張り煙草をふかしてゐたが、仲間の歸つて來たのを見ると、かゝるたをやらうと言ひ出した。二人は長い間向ひ合ひ

に坐つて、ブリスクといふ單純な勝負事をやつてから、夕飯を食へて床に入つた。

それから數日の間は、雪は降らなかつたが、初めの日のやうに晴れ渡つて寒かつた。年寄のガスバルトは午後は毎日、鷲や其の他の珍らしい鳥などが、それらの凍り切つた高地に來るのを見張つてゐたが、ウルリッヒは極つてゲンミイ山の頸部へ村を眺めに行つた。夕方になると、二人はかゝるたや双六やドミノなどをやつた。そして、其の勝負に興味を添へる爲めに、僅ばかりの金を賭けて勝つたり負けたりした。

ある朝、先きに起きたハリは仲間を呼んだ。深い、軽い、動いてゐる白い水煙の雲が、音もなく彼等の上に落ちて、次第に暗い濃い泡の蔽ひて彼等を埋めてゐた。これが四日四晩續いた。そこで、戸や窓を自在に明くや

うにしたり、道を掘つたり、この凍つた粉の上に足場を切つたりしなければならなかつた。十二時間も氷結したので、雪は堆石花崗のやうに堅くなつてゐた。

二人は四人のやうに暮らしてゐて、敢て外へ出ようとはしなかつた。二人は仕事を分擔して規則正しくやつてゐた。ウルリツヒ、クンジは磨きものや洗ひものや、それから、すべて掃除に關することを受持つた。彼はまた薪をも割つた。ガスバルド、ハリは煮焚をしたり火に氣を附けたりした。で、この極り切つた單調な仕事は、かるたや双六の長い勝負で時々破られた。が、二人は決して喧嘩をしなかつた。いつも静かて穩かてあつた。決して氣を悪くしたり機嫌を損ねたりもしなければ、また荒い言葉を使ふことすらなかつた。それは、この山の上で冬を過ごすといふことに對して何

事も辛棒したからであつた。

時々、年寄のガスバルドはライフル銃を取つて羚羊を追つかけた。そして偶には射殺すこともあつた。すると、シエワレンバッハの宿屋では御馳走があつて、二人は新しい肉で盛んに酒盛をした。ある朝彼はいつものやうに出て行つた。外の寒暖計は氷點以下十八度を示してゐた。太陽はまだ登らなかつたので、獵師はウイールドストルウベル山の近くで動物を驚かさうと思つた。ウルリツヒは一人きりになつたので、十時になるまで床の中にゐた。一體彼は眠がりの方だつたが、いつもなら、年寄の道案内が早起きだから、そのゐる前ではこんなな爲ようとはしなかつたであらう。彼はこれもまた、晝も夜も爐の前に寐てばかり暮らしてゐるサムと一緒に、暇取つて朝飯を食べた。所がどうも元氣が無くて、果ては獨りてゐるのが

恐ろしいやうな気がして来た。そして、毎日やるかるたの勝負を、丁度押へることの出来ぬ習慣の方で支配されてゐる人のやうに、どうでもかうてもやりたくなつた。で、四時に歸る筈の仲間を迎へに出掛けた。

雪は深い谷をすつかり平らにし、裂罅を満たし、二つの湖水の形を全く塗り潰して了ひ、すべての岩を蔽うてゐたので、高い頂と頂との間には、唯だ大きな、白い、かつきりとした、凍つた面が閃々と輝いてゐる外には、何物もなかつた。三週間の間、ウルリツヒは、村の方を見下した崖際に行かなかつたので、ウイルドストルウベル山へ行く傾斜を登る前に、先づ其處へ行かうと思つた。ロオエツクも今は雪に覆はれて、人家はまるで白い外套でも着たものごとく殆ど見分けることが出来なかつた。

右の方へ曲つて、ウルリツヒはラアメルン氷河に達した。彼は金具のつ

いた杖を岩のやうに堅い雪に打ち込み、山に住む人の大またな歩き振りで進んで行つた。其の大きな白い擴がりの上に鋭い目を放つて、はるか

に、小さく動いてゐる黒點を求めながら。彼は氷河の端れに達した時に立止つて、老人が果して此の道へ来たか何うかと考へてから、急いだ不安な足取りで堆石の上を歩き初めた。日は暮れかゝつて来た。雪は薔薇色を着け、乾いた、凍つた風は其の結晶した面を荒い疾風となつて吹いた。ウルリツヒは、耳を貫くやうな頭へ聲を長く上げて呼んだ。其の聲は山々の眠つてゐる死のやうな沈黙の中を走つて、宛も海の波濤の上の鳥の叫び聲のやうに、氷結した泡沫の奥深い不動な波濤の上を遠くまで擴がつて行つた。そして消え失せたが、彼に答へるものは何もなかつた。

彼はまた歩き出した。日はもう山の頂の向うに沈んで、其の頂はまだ空からの反對で紫色をしてゐたが、谷の深いあたりは次第に灰色になつて来た。て若者は不意に恐ろしくなつた。沈黙、寒氣、寂寥、山々の冬の死といふやうなものが彼に取り憑いて、血の循環を止めて凍らし、四肢を硬ばらし、氷結して動かぬ物と化せしめて了ふやうに思はれたので、急いで住居の方へ走り出した。彼は思った。老人は自分の留守の間に歸つたであらう。多分別の道を取つたので、今頃は屹度、死んだ羚羊を足元に置いて、火に當つてゐるであらうと。

彼は直ちに宿屋の見える所へ来たが、烟は上つてゐなかつた。ウルリツとは一層急いで走つた。戸を明けると、いきなり嬉しげに飛び付いたサムには出會つたが、ガスバルドは歸つてゐなかつた。クンジはぎよツ

として急に四邊を見廻した。丁度、隅に隠れてゐる仲間を見付けることが出来ると思つたやうに。やがて彼は火を點けてスツブを作へ、老人の歸つて来るのを今かくと待つた。絶えず、もしやガスバルドが見えはせぬかと思つて外に出ても見た。今はもう夜となつた。青白い山上の夜、鉛色の夜となつた。黄色な薄暗い新月は、將に山の頂の向うに沈まんとして、かすかに地平線の端れを照らしてゐた。

そこで若者は内に入つて手足を暖めながら、有り得べきさまぐな出来事を胸の中に描いて見た。ガスバルドは脚を挫いたのではあるまいか。裂罅の中に落ちたのではあるまいか。踏み外して踝を狂はしたのではあるまいか。多分雪の上に倒れてゐて、寒さの爲めに身が硬ばつて行く所から、心の苦しさに堪へ切れないうて、このしんとした夜中にもなほ力限りの聲

を振りしほつて助けを求めてゐるのであらう。

併し何處か？ この山は頗る廣漠としてゐて、高低があつて、殊にこの季節には危険の場所が多いから、其の茫漠とした場所て一人の人を見付けらるには、十人が二十人の道案内が、各方面に手を分けて一週間も歩き廻らなければならぬであらう。けれども、ウルリッピ クンジは、もし朝の一時になつてもガスバルドが歸らなかつたならば、サムを連れて出掛けようと心を極めて其の支度をした。

彼は二日分の食料を藁の中に入れ、攀ぢ登るに必要な鋼鐵の鎖を取出し、長い、細い、強い繩を腰の周圍に巻き付けて、さらに、金具の附いた杖や、氷に足場を切りつけるに必要な斧などが揃つてゐるかをも見て置いた。そこで、彼は待つた。火は爐に燃え、大きな犬は其の前に軒をかがいてゐた。

そして時計は其の響く木の函の中で、心臓の鼓動のやうに規則正しくかちくと鳴つてゐた。

彼は遠くの物音にも油断なく耳を澄して待つた。そして、風が屋根や壁などに當る毎に頭へた。十二時が打つと彼は身震ひした。で、恐ろしくなつて頭へてたまらぬから、出掛ける前に熱いコホイを飲まうと思つて湯を沸かした。時計が一時を打つと立上つてサムを起し、戸を明けて、ウイルドストルウベル山の方へ向つて出掛けた。五時間の間、彼は登つた。鎖を掛けて岩を攀ぢたり、氷に足場を切りつけたりして、絶えず先きへくと進んだ。そして時々、餘り峻険で犬に登れぬ所などでは、傾斜の下の方に止まつてゐるのを繩で引張り上げたりした。六時頃、年老のガスバルドがしばしば、羚羊を追うて來た頂の一つに達して、彼は太陽の登るを待

つた。

空は次第に上の方が白んで来た。と不意に、不思議な光が何處からとも知れず湧き出して来て、彼のまはり數里に涉つて廣がつてゐる渺々たる海原のやうな蒼白い山々の頂を不意にはツと照らした。この漠然とした光は、空間に擴がる爲めに雪の中から發して来たかのやうに見えた。次第に、一番高い、一番遠くの頂が柔らかな、肉のやうな蔷薇色を見せて、赤い太陽がどツしりとした巨人のやうなベルニイズ アルプの後から現はれた。

ウルリツヒ クンツはまた出掛けた。獵師のやうに、何かの跡はないかと屈んでは探した。そして、犬には「爺さんを探せ、よ、探せ！」と言ひく歩き廻つた。

今度は山を下つて行つた。深い所には特に氣を配つた。絶えず、高い、

後を引張つた叫び聲を擧げて呼びもしたが、それは直さに消えて了つて、後は寂とした廣漠に返つた。そこで、耳を地につけておつと聞き澄した。彼は聲音を聞き得たやうに思つたので、馳け出しながらまた叫んだ。が、もう何も聞えはしなかつたので、身は疲れ、望は失せて坐つて了つた。眞晝に近くなつて、彼は朝飯を食べた。そして、自分と同じやうに疲れてゐるサムにもまた食ふ物を與つた。かくてまた搜索を始めた。

夕方になつても彼はなほ歩いてゐた。山の上をもう三十哩以上も歩いたのであつた。家へ歸るには餘りに遠くもあるし、それに、この上身を曳きずつて行くにしては餘りに疲れてもゐたので、彼は雪に穴を掘つて、犬と一緒に其の中へ蹲まつて、持つて来た毛布を上につけた。人間と犬とは並んで横になつて、互に暖め合はうとしたが、それでも寒さは骨の髄まで通

つた。

空は次第に上の方が白んで来た。と不意に、不思議な光が何處からとも
 知れず湧き出して来て、彼のまはり數里に涉つて廣がつてゐる渺々たる海
 原のやうな蒼白い山々の頂を不意にぱつと照らした。この漠然とした光は、
 空間に擴がる爲めに雪の中から發して来たかのやうに見えた。次第に、一
 番高い、一番遠くの頂が柔らかな、肉のやうな蔷薇色を見せて、赤い太陽
 がどツしりとした巨人のやうなベルニイズ アルプの後から現はれた。
 ウルリッヒ クンツはまた出掛けた。獵師のやうに、何かの跡はないか
 と屈んでは探した。そして、犬には「爺さんを探せ、よ、探せ！」と言ひ
 く歩き廻つた。

今度は山を下つて行つた。深い所には特に氣を配つた。絶えず、高い、

後を引張つた叫び聲を擧げて呼びもしたが、それは直さに消えて了つて、
 後は寂とした廣漠に返つた。そこで、耳を地につけておつと聞き澄した。
 彼は聲音を聞き得たやうに思つたので、馳け出しながらまた叫んだ。が、
 もう何も聞えはしなかつたので、身は疲れ、望は失せて坐つて了つた。眞
 晝に近くなつて、彼は朝飯を食べた。そして、自分と同じやうに疲れてゐ
 るサムにもまた食ふ物を與つた。かくてまた搜索を始めた。

夕方になつても彼はなほ歩いてゐた。山の上をもう三十哩以上も歩いた
 のであつた。家へ歸るには餘りに遠くもあるし、それに、この上身を曳き
 ずつて行くにしては餘りに疲れてもゐたので、彼は雪に穴を掘つて、犬と
 一緒に其の中へ蹲まつて、持つて来た毛布を上を掛けた。人間と犬とは並
 んで横になつて、互に暖め合はうとしたが、それでも寒さは骨の髄まで通

つた。ウルリツとは殆ど眠らなかつた。心は幻に附き纏われ、手足は寒さに顫へてゐた。

夜が明けかゝつた時に彼は起き出た。脚は鐵の棒のやうに硬く、元氣は失くなつて泣きたいほどであつた。そして心臓はとらへば、物音を聞いてはツと思つた時に激動するやうに烈しく打つてゐた。

不意に彼は、自分もまた此の茫漠とした寂寥の中で、凍えて死なうとしてゐるのではないかと思つた。この死の恐怖が彼の氣力を恢復して、彼に新しい元氣を興へた。彼は宿屋の方へ向つて、轉んだり起きたりしながら下りて行つた。少し後れて、サムは三本跡で跛を引き、隨いて行つた。彼等がニューロンバツンに着いた時は午後の四時を過ぎてゐた。家は空たつた。若者は火を起して、何かを少し食べると思つた。もうさんく

に疲れ果てゐて、この上何事をも考へられなかつたのである。

彼は長い間、實に長い間眠つた。それは何事も打ち勝つことが出来ぬ疲労の眠りであつた。所が不意に『ウルリツヒ』と呼んだ聲音が、叫びが、名前が彼を深い眠りから呼び起して床の中に坐らせた、夢を見たのではなかつたか？ それは不安な心を抱いてゐる人々の夢を横ぎるかの怪しの聲が一つではなかつたか？ 否、彼が聞いた叫び聲はまた反響しつゝある——それは耳から入つて頭腦に留まり——筋ばつた指の尖までも震はしてゐる。確に誰か叫んだのだ。『ウルリツヒ！』と呼んだのだ。誰か其處に、家の近くにゐたんだ。それに就いて何の疑ふ餘地もなかつた。で、彼は戸を明けて、『誰だ、ガスバルドぢやないか！』と肺一ぱいの力を籠めて叫んだ。併し何の答へも、何の眩きも、何の呻きも、何もなかつた。外は眞暗

て雪が青白く見えた。

風が吹き出した。其の氷のやうな風は岩を墮入らしたり、荒寥としたそれらの高地に生きたものを一つも残さなかつたりするものである。それが不意に烈しく吹き出して来た。沙漠の燃えるやうな風よりも一層乾いてゐて一層命を残ふものだつた。て、ウルリツヒはまた叫んだ。『ガスバルド！ガスバルド！』と。そしてまた暫く待つて見た。すべてのものは山の上にしんとしてゐた！すると、彼は恐怖で顫へて家の中へ飛び込んだ。戸を締めて門を挿すと、全身を顫はしながら椅子に腰を落した。それは、仲間が最後の息を引取らうとした瞬間に彼を呼んだと確に感じたからである。

彼がそれを確に感じたのは人が自分の生きてゐることを確に感じたり、

また、物を食べる時に其の味を確に感じたりするが如くであつた。年寄りのガスバルド、ハリは二日三晩の間、何處か、穴の中か、人跡のまだ到らぬ深い谷か、兎に角其の眞白なのは地の下の眞暗なのよりも一層身體に毒な所で死にさうになつてゐた。二日三晩の間死にさうになつてゐて、丁度今、仲間の事を思ひながら息を引取つた。其の魂が肉體を離れようとした時に、ウルリツヒが眠つてゐる宿屋に飛んで来て、死人の靈が持つてゐる恐ろしい神秘的な力で彼を呼んだのだ。其の聲の無い魂が眠つてゐる人の疲れ果てた魂に向つて叫んだのだ。それは最後の暇乞か、てなければ、十分に氣を附けて捜さなかつたのを責めたり呪つたりしたのであつた。て、ウルリツヒは魂が其處に、直き傍に、壁の向うに、今締めた戸の向うにゐるやうな氣がした。それは丁度夜の鳥が、明りのついた窓を翼で掠

めて行くやうに、ふわふわりと小迷うてゐるやうであつた。で、若者は恐ろしさの餘り叫び出さうとした。彼は逃げ出したいと思つたが、併し外へは敢て出なかつた。然り、敢て出なかつた。これから先きも決して出まいと思つた。それは、老人の身體が取返されて墓場の聖い土に葬られぬいうちは、其の亡靈が、晝も夜も、宿屋の周圍に留まつてゐるであらうから。

夜が明けると、太陽がまたさらりと輝いて來たので、クンジは多少の勇氣を恢復した。彼は自分の食事を調べ、犬にも食ふ物をやつた。そして雪の上に倒れてゐる爺さんのことを考へては胸を傷めながら、椅子の上におつと身動さもせずになつた。やがて、夜がまた山々を包むと、新らしい恐怖が彼を襲うた。彼は一本の蠟燭の炎燄で微かに照らされてゐる暗い厨の

中を行つたり來たりしてゐた。前夜の恐ろしい叫び聲が、また外の恐ろしい沈黙を破りはせぬかどちつと耳を澄しながら、端から端へと天股に歩いてゐた。彼は今迄かつて何人も唯一人であるなかつた境涯に、唯一人である自分をつつと不幸な身と感じた。此の荒寥とした雪の高原に唯だ一人！人の住んでゐる土地や、人間の住家や、かの忙しい、騒がしい胸の躍る生活などから五千呎も離れた上に唯だ一人！凍つた空の下に唯だ一人！考へて來ると、氣も狂はしくなつて、何處へても構はずに逃げ出したくなつたり、一思ひに絶壁に身を投げるやうにしてロオエツクベ落ちて行きたくなつたりした。が、彼は思ひ切つて戸を明けることすらしなかつた。今一人の死んだ男が、獨りて其處に留まるやうにさせられまいと、彼の行く手を塞ぐであらうと思つたからである。

眞夜中近くなると、彼は歩き疲れて、悲しいやら恐ろしいやらでも疲れ果て、椅子に腰を掛けたまうとくんと眠つた。彼は自分の寢床を、人が幽霊の出る場所を怖がるやうに怖がつてゐたのである。所が不意に、前夜と同じさういふ叫び聲が鋭く彼の耳を貫いた。で、ウルリッヒは両手を擴げて其の亡霊を追拂はうとした。と忽ち、椅子と共に後へ引繰り返つた。

サムは此の物音に目を覺まして、あびえた犬が咆えるやうに咆え初めた。そして何處から危険が來たのかを見出さうとするやうに家の中をぐるぐる歩き廻つた。戸口まで行くと、彼は其の下に鼻をつけて烈しく嗅ぎ廻し乍ら、毛を逆立て、尾を硬くして、怒つて唸り立てた。クンジは恐ろしくなつて飛び上ると、片足を椅子に掛けて、「入つて來るんぢやない。入つて來

るんぢやない。入つて來ると殺すぞ。」と叫んだ。すると犬は此の嚇しに勵まされて、主人の聲を物ともしないやうな其の目に見えぬ敵に向つて怒つて咆えた。が、次第に靜かになつて戻つて來ると、火の前に長々と身を伸ばした。が、まだ安心しきらないで、頭を擧げて齒の間で唸つてゐた。

ウルリッヒもまた正氣に復つたが、彼は恐怖で元氣の衰へたことを感じたので、起つて行つて傍棚からブランデーの罇を取つて續けさまにがぶりがぶりと五六杯飲んだ。頭がぼんやりして勇氣は恢復し、熱病のやうな灼熱が血管を通つて走つた。

其の次ぎの日は殆ど何にも食はずに酒ばかり飲んだ。さうして五六日の間は酔つた獸のやうになつて暮らした。彼はガスバルド、ハリのことを思ひ出すと直ぐにまた飲み初めた。そして泥酔して床の上に倒れるまで飲み

つぎけた。そして其處に其のまゝ、死んだやうに酔つて、手足は痺れたま
 だで、床に顔をつけて野をかき乍ら倒れてゐた。けれども、此の氣を狂は
 せるやうな、燃えるやうな飲料がやつと消化して了つたと思ふと、忽ちま
 た「ウズルリツト」と呼ぶ同じ叫び聲が、頭腦を貫通する彈丸のやうに彼を呼
 び覺した。で、彼はまたひよるひよるじ乍ら倒れまいとするやうに兩手
 を擴げて起き上ると、ササに助けを求めた。すると、主人と同じく氣が狂
 つて行くやうに見えた犬は、戸口に飛んで行つて、それを爪で引掻いたり
 長い白い齒で噛んだ。一方ではまた若者が、頭を仰向けで頭を空に
 し、まるで冷たい水かなぞのやうにがぶぐぶとオランダ酒を飲んで、思想
 や、物狂はじの恐怖や記憶をやがてまた眠らせようとした。三週間の
 間に、彼は時へて置いた強い火酒をみんな飲み盡した。所が、

彼が絶えず酔つてゐたのは唯だ恐怖を鎮めたばかりであつたから、酔つて
 それを鎮めることが出来なくなつたと思ふと、忽ち恐怖は會てより一層烈
 しくなつた。彼の固定觀念は、泥酔の一ヶ月で強くされたり、全くの孤獨
 で絶えず度を増したりして、錐のやうに鋭く彼を刺した。今や彼は檻に入
 れられた野獸のやうに家の中を歩き廻つて、時々耳を戸に附けて奴が其處
 にゐはしないかと聞き澄したり、壁越しに戦を挑んだりした。やがて、疲
 れ果て、まどろんだかと思ふと、忽ち彼はいつもの聲を聞いて飛び上つた。
 とうとう、或る晩、臆病者が極端まで追ひ詰められた時にするやうに、彼
 は戸口へ飛び出してそれを明けた。そして自分を呼んでゐる奴を見て靜か
 にさせようとした。所が、骨まで凍らせるやうな冷たい風がさつと彼の顔
 に吹き付けた。で、彼はサムが飛び出したのには氣が附かず、直ちにま

二六六
た戸を締めて門を挿した。そこで、寒さに顛へてゐたから、火に薪を足して暖まらうと其の前に坐つた。所が不意に彼は飛び上がった。誰か壁を掴みながら叫んでゐたからである。死物狂ひになつて彼は「しいッ」と叫んで見たが、答へたものは唯だ長い悲しげな泣き聲ばかりであつた。そこで、残つてゐたすべての正氣も、全くの恐ろしさから彼を見捨て、了つた。彼は「しいッ」とまた繰返して、何處かに隠れる隅はないかと思つた。外ではまた他の奴が、やはり泣きながら、そして壁に身をこすり付けながら家を廻つて歩いた。ウルリツとは皿や鉢や食料品など一杯になつてゐる櫛の側棚の傍へ行つた。で、それを人間業とは思へぬ力を持ち上げると、保障でも作らうとするやうに戸口へ引きずつて行つた。次ぎには、臥褥や、蓑褥や、椅子や、其の他一切の家具を積み上げて、人が敵に

襲はれた時にするやうに窓を皆んな塞いで了つた。

二六七
所が、外の奴は、今度は長い、哀れな、悲しげな唸り聲を發じたので、若者はそれに同じ唸り聲で答へた。かくして數日數夜、互に咆えることを止めずに過ぎた。一方は絶えず家の周囲を廻つて、爪で壁を、まるで破壊しようとしてゐるかと思はれるほど強く抓いた。すると内ではまた外の者のすべての動作に従つて、身を屈めたり、耳を壁に附けたり、訴へるすべての聲に恐ろしい叫び聲で答へたりした。所が、ある晩ウルリツとはふと何物をも聞かなかつた。で、彼は坐ると、非常に疲れてゐたので直ちに眠つて了つた。朝になつて目が覺めたが、其の時はもう、丁度彼の頭が重い眠りの間に空虚にされたものゝやうに、何の考もなければ、起つたことについての何の記憶もなかつた。たゞ彼は腹が空いてゐたので物を食べた。

冬が過ぎて、ゲンミイ山の山越えがまた出来るやうになつたので、ハウゼルの一家は宿屋に歸らうと出立した。彼等が峠の頂まで着くと、女達は驛馬に乗つて、直ちにまた逢へようといふ二人の男のことを話し合つた。實は、もう二三日前から道が通れるやうになつたのに、長い冬籠りの間のことを話しに誰も山を降りて來なかつたのを彼等は不審に思つてゐた。が、とうとう彼等は宿屋を見た。また雪に蔽はれて蒲團のやうな姿をしてゐた。戸も窓も締めてあつたが、細々とした煙が煙突から上つてゐたので、親爺のハウゼルは安心した。所が、戸口まで近付いて行つた時に、彼は其の傍に横たはつてゐる大きな骸骨を、鷲の爲めに散々に啄き裂かれた動物の骸骨を見た。

一同は近く寄つてそれを見た。

『これは屹度サムだよ。』と母親が言つた。そこで彼女は叫んだ。『あうい！ ガスバルドや！』

家の中から叫び聲が彼女に答へた。何かの獸が發したとしか思へぬやうな鋭い叫び聲であつた。

『あうい！ ガスバルドや！』と親爺のハウゼルが繰返した。と、彼等はまた初めと同じ叫び聲を聞いた。

そこで、父親と二人の息子の三人の男は、戸を明けようとしたが、中々明かなかつた。で、空つぼの牛小屋から梁を取つて破城槌の代りとして、それを一同が全力を籠めて戸に打ち付けた。木は毀れ板は木葉微塵に飛び散つた。その時、家は高い聲で震へ渡つた。と、内には、顛覆してゐる側

棚の向うに、一人の男が突ツ立つてゐた。髪は肩まで垂れ、髭は胸まで伸び、眼はきらりと光つて身體は襦袢に包まれてゐた。一同は彼を誰とも分らなかつたが、ルイゼ ハウゼルが聲を上げて、『お母さん、ウルリッヒだよ。』と言つた。で、母親も、髪は白くなつてゐるが、ウルリッヒに違ひないと言つた。

彼はみんなが傍へ寄つて、身體に手を掛けても、人のする儘に任してゐたが、何を尋ねても答へなかつた。で、餘儀なくロオエックへ連れ歸つて醫者に診せると、氣が狂つてゐたのであつた。爺さんが何うなつたかは遂に誰も知ることが出来なかつた。

娘のルイゼ ハウゼルは、其の夏身體が次第に衰弱して殆ど死にさうに

なつた。醫者はそれを山上の空氣が寒い所爲だと言つた。

(終)

印刷日 五月二十日 明治四十四年
発行日 九月二十日 明治四十四年



十種モウバツサン集

定價金四拾五錢

譯者 前田 晁

發行者 大橋 新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行所 博文館
東京市日本橋區本町三丁目

印刷者 飯田 三千太郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十三番地

印刷所 鐵秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十三番地



本書は勝利三幕清濁四幕遺言一幕空想三幕の四篇を収む
本書は著者が登場研究の経験により直に實踐に適せし
全一冊菊列上製
紙數三百四十一頁
土居春曙君譯

新社會劇

正價金六拾五錢
小包料金八錢

むる様作りたるもの
されば本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りては唯一の新階梯にして又我藝壇に資すべき清新の好著なり

千葉紫草君譯

最近外交秘密

正價金拾錢 郵稅四錢

若松賤子女史譯

小公子

正價金卅五錢 郵稅八錢

森田思軒君譯

十五年少年

正價金卅五錢 郵稅八錢

高橋光威君譯

ロビン 絶島漂流記

正價金四拾錢 小包八錢

相馬御風君譯

組篇 茲に譯出せられたる六篇は六種
ゴリキキが最も得意とせる短篇中更に最も傑出せるものを選びたるものなれば人一度是れを讀かんか大膽深刻なる描寫を以て成る歐洲文壇の新作風とかの最も男性的の力に充つと稱せられたるゴリキキが崇高なる新人生觀とを窺ひ知るを得べし

集一キリーゴ

全一冊四六列美本 正價四拾五錢
表紙コロタイプ刷 郵稅六錢

本書は英國少年の爲めにチャールズ、ラムと其姉メーリとが物したる沙翁物語中特に十篇を選びたるものに
全一冊四六列美本
紙數三百九十頁
文學士小松月陵君譯

沙翁物語十種

正價金四拾五錢
郵稅 金六錢

して譯者の意志は廣く我國社會一般に不朽の大著沙翁劇を味はしめん事を庶幾するが故也

陸軍教授司馬亨太郎君譯

小説 黄金村

正價四拾五錢 郵稅八錢

河井道子辻村靖子共譯

小説 ひとりぼつち

正價六拾五錢 郵稅八錢

前田露子女史抄譯

小説 小姫君

正價四拾五錢 郵稅六錢

松居松葉君譯

小説 天小屋

正價金四拾錢 郵稅四錢

吉江孤雁君譯

ロシヤの文豪ツルゲーネフの傑作三篇を收む。曰く『幻』曰く『ファウスト』曰く『ム』幻とファウストとは作者が現實の世界と神秘の世界との接觸點、可解と不可解との交渉を捉へたるもの『ム』は愛の戀と可憐な犬との物語にして哀愁と可笑味と其筆端に横溢せり作者が如何に人生を解剖してこれを巧妙に再現したるか。其人生觀は如何。其自然觀は如何。この一卷は實にこれを明らかに窺ひ知らしむるもの也。

集フネーゲルツ

全一冊四六列 正價四拾八錢
體裁 諸酒美本 郵稅六錢
紙數 三百六十頁

巖谷小波君 石橋思案君 共輯

故尾崎紅葉君著

一(容 内)一

- 第一卷 〇色機梅 〇新桃花扇 〇南無阿彌陀佛 〇戀の蛭 〇夏夜 〇新色機梅 〇猿枕 〇七
- 〇十二文命の安寝 〇風雅娘 〇巴波川 〇拈華微笑 〇此ぬし 〇關東五郎 〇文なが
- 〇し 〇わかれ蚊帳 〇二人むく助 〇二人女房
- 第二卷 〇伽羅枕 〇むき玉子 〇夏小袖 〇おぼろ船 〇紙きぬた 〇戀の病
- 第三卷 〇三人妻 〇男ごころ 〇袖時雨 〇俠黒兒 〇心の闇 〇むらさき
- 第四卷 〇隣の女 〇厩料理 〇冷熱 〇宵葡萄 〇不言不語 〇三箇條 〇浮木丸 〇八重櫻
- 第五卷 〇多情多恨 〇千箱の玉章 〇安知歌 〇戀林 〇寒牡丹
- 第六卷 〇金色夜叉前編 〇金色夜叉中編 〇金色夜叉後編 〇綴金色夜叉 〇綴々金色夜
- 又 〇新綴金色夜叉 〇煙霞 〇紅葉山人傳 〇紅葉著 〇作年表

全六册菊判特製
表裝美麗紙數
一册九百五十頁

正價 金壹圓八拾錢
全部 金拾圓

小包各金拾貳錢

紅葉全集

博文館發行

巖谷小波君 石橋思案君 共輯

故川上眉山君著

一(容 内)一

- 第一編 〇雪折竹 〇風流狂言記 〇お胸 〇有明 〇青葉 〇大さかづき 〇書記官 〇うらお
- 〇もて 〇鹿子紋 〇烏田くづし 〇奥様 〇船橋 〇柴栗 〇うつけい 〇世員 〇寢醒 〇いさゝ
- 〇川 〇碧水志 〇逸樂編 〇黄昏 〇塵影 〇結塵
- 第二編 〇梅紅葉 〇左巻 〇野人 〇行衛 〇二重帯 〇一軒百姓 〇鶴澤橋 〇三銃士
- 第三編 〇脊背 〇虚偽の假 〇落葉 〇爪木折 〇綾小袖 〇春潮 〇片影 〇滑稽相續 〇三人男
- 〇濤標 〇萬平 〇凡人界 〇妖艶 〇弱氣質 〇希望 〇小妾記 〇喜劇仙臺平 〇裏座
- 〇敷 〇明眸 〇小町紅
- 第四編 〇新家庭 〇昔の戀 〇梅の寮 〇同胞 〇竈道 〇一夜天下 〇寶の山 〇千紅萬紫

全四册菊判特製
表裝美麗紙數
一册八百五十頁

正價 金壹圓八拾錢
全部 金六圓貳拾錢

小包料一册金拾貳錢

眉山全集

博文館發行

著君步獨田木國故

獨步全集

一→(容 内)←一

全二册洋装菊判特製函入美本 著者肖像及其他寫真版數葉挿入 前編 正價各金貳圓 小包料各金拾貳錢

前編 ○牛肉と馬鈴薯 ○運命論者 ○巡査 ○酒中日記 ○富岡先生 ○空知川の岸邊 ○郊外 ○鎌倉婦人 ○神の子 ○源をぢ ○星 ○園遊會 ○春の鳥 ○少年の悲哀 ○夫婦 ○河霧 ○小春 ○遺言 ○初孫 ○岡本の手紙 ○わかれ ○置土産 ○湯ヶ原より ○日の出 ○非凡なる凡人 ○雷の悲み ○馬上の友 ○悪魔 ○正直者 ○第三者 ○女難

後編 ○竹の木戸 ○二老人 ○泣笑ひ ○渚 ○たき火 ○おとづれ ○詩想 ○忘れぬ人々 ○まぼろし ○鹿狩 ○二少女 ○帽子 ○あの時分 ○死 ○波の音 ○號外 ○歸去來 ○別天地 ○初戀 ○絲くづ ○非凡人 ○武藏野 ○入郷記 ○湯ヶ原ゆき ○疲勞 ○腋の侮辱 ○都の友へ B生より ○節操 ○窮死 ○戀を戀する人 ○暴風

博文館發行

著君魚松村田

北米の花

全一册洋装菊判 表裝華麗頗美本

正金壹圓拾錢

小包料金拾貳錢

萬朝報評(前略)卷首の「野調」は米國加州の日本殖民地に於ける遊放的生活を描きたるものに於て環境の曠野に悲秋の暮を讀ひながら鳥銃を肩にとほく砂道をあこがれゆく著者の感慨を極めて新しく且つ眞率にあらはしたるもの、飛伴の詩人が現世から離れて濶き同情を美しき野鳩の死に寄せながら涙ぐめるあたりは肉慾的作品ばかり多き當今の文壇の思潮と趣を異にして珍らしくも又嬉しき心地す、第二「出世間」は伊太利種のマンドリン弾きの美少女と日本の一青年との戀物語を描きたるもの、第三「新知人」は米國紳士の日本婦人觀第四「日記の餘白」は外遊した文士の所感を描きたるもの、北米の花は著者が久し振る日本文壇に新生面を開かんきたり要するに北米の花として高き調子の響きを發したるものなり

北米世俗觀

全一册三六判 體裁瀟灑美本 三色版口繪入

正價金參拾五錢 郵税金四錢

博文館發行

著 君 袋 花 山 田

近 作 十 五 篇

全一册洋装四六判體裁補酒
橋本邦助君筆押高十四葉

正 金 七 拾 五 錢

郵 稅 金 八 錢

内 容
拳銃 寫真
庖丁 眞

父の墓 死

幼鍾 丘の家

二階の一間 一家の主人
竹馬の友

町より山へ 騎兵士官
二人づれ

小 説 作 法

内 容
○小説と作法
○私の経験
○初學者の爲めに
○叙事、抒情、會話
○ロマン
○小説と作法
○讀者と作者
○觀察と描寫
○今日の文藝と昔の文藝
○明治名作解題
○餘談
○菴頭(雜文集)海の美以下十七項

全一册四六判
洋裝美本
二百八十九頁

正 價 金 參 拾 五 錢
郵 稅 六 錢

博 文 館 發 行

著 君 蔭 水 見 江

小 説 牡 丹 族

最

新

版

全一册洋装四六版並製
美本 紙數四百九十頁

正 金 五 拾 五 錢

郵 稅 金 八 錢

著者最近の努力に由つて成つた快著述です。其思想は奇抜にして其文章は圓熟、他に類と眞似手の無いのが實に水蔭子の筆。最初の一頁を開いたら最後、逆も巻を描く事が出来ない程面白い。知らず識らず五百餘頁の大冊を讀み盡さずには居られませぬ。讀み盡しても未だ餘韻は長く響いて居ります。文學上の價值を有しながら興味の高著斯く多き小説は全く珍らしいです。

● 小説大 蠻 男、 正價五拾錢
郵稅八錢

● 探險地中の秘密 正價五拾八錢
小包八錢

● 實地捕 鯨 船 正價三十五錢
郵稅六錢

● 地底探檢記 正價四拾錢
郵稅八錢

● 小探檢女王 正價四拾五錢
郵稅六錢

● 少年探檢隊 正價三拾八錢
郵稅六錢

博 文 館 發 行

名家小説文庫

發行所
博文館

本庫著者最近文壇に盛名

- 第一編 ● 露伴叢書 上巻
 菊判特製函入美本 紙數九百七十二頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○自傳 ○二日物語 ○夜の雪 ○僥倖 ○縁の糸 ○休暇傳 ○毒朱唇 ○ひげ男 ○新學士 ○迷霧 ○和合樂 ○川舟 ○大珍話 ○客舍雜筆 ○地獄谷日記 ○將棋雜考 ○將棋雜話 ○元祿時代の雜劇 ○伊能忠敬 ○まき筆日記 ○客舍雜筆 ○地獄谷日記 ○將棋雜考 ○將棋雜話 ○元祿時代の雜劇 ○折々草
- 第二編 ● 露伴叢書 下巻
 菊判特製函入美本 紙數九百八十六頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○枕詞物語 ○春の山 ○當世外道の面 ○封じ文 ○鐵三段 ○自繩自縛 ○蹄鐵 ○冷干水 ○根草 ○銃獵 ○孝行 ○夢日記 ○ひとと草 ○新浦島 ○鄭成功 ○日蓮上人 ○二宮尊徳 ○突貫行 ○行 ○醉興記 ○易心後語 ○春の一日 ○うつしる日記 ○遊行雜記 ○旅の心得 ○知々夫紀行 ○文明の庫
- 第三編 ● 澁柿叢書
 菊判特製函入美本 紙數千頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○釜煮 ○妻の心 ○猿冠者 ○鐵火 ○聚樂殿 ○鳥助左衛門 ○是非もなき ○不老術 ○新法 ○夢と夢 ○武十郎 ○親の面 ○五月女 ○三千石 ○男の面 ○由井正雪 ○大石内蔵之助 ○碧玉盤 ○大風乾之助 ○他流試合 ○脱走兵 ○振武軍 ○密告 ○此の戀
- 第四編 ● 柳浪叢書 前編
 菊判特製函入美本 紙數千四百頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○おもしかけ橋 ○昇降場 ○骨ぬすみ ○妾 ○今月心中 ○隅田の夜路 ○罪の悶 ○變目傳 ○都の夢 ○狂言 ○畜生腹 ○重づま ○貯金玉 ○花ぐるひ ○幼時

本庫内は内容美の釘装麗紙

馳せたる代表傑作各二十餘篇宛に收む

- 第五編 ● 柳浪叢書 後編
 菊判特製函入美本 紙數千頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○非國民 ○兄の煩悶 ○二人やもめ ○五反田 ○親ごころ ○淺瀬の波 ○名物松浦饅頭 ○七勝 ○落雪見酒 ○八幡の狂女 ○そまる糸 ○歌加留多 ○亡き母 ○實生樹 ○あにき ○座敷半 ○黒蟻 ○紫被布 ○女中心 ○くされ縁 ○中川心中
- 第六編 ● 花袋叢書
 菊判特製函入美本 紙數千三百四十四頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○夕張少女 ○女教師 ○島的心中 ○老夫婦 ○新築の家 ○春の別れ ○一齋家の日記 ○令妹 ○浪花節の名手 ○寫生の花 ○一家の妻 ○初戀の人 ○無辜 ○不慮の禍 ○二人小屋 ○憶梅記 ○思ふどち ○深山窮谷 ○老僧 ○小桃源 ○みやまの鶯 ○悲劇 ○孤島
- 第七編 ● 水蔭叢書
 菊判特製函入美本 紙數千二百頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○女房殺し ○新潮來曲 ○旅役者 ○林間の高塔 ○湖心の誓 ○紫海苔 ○地底の人 ○唯下の家 ○燈 ○水樓記 ○別莊守 ○紙子くらへ ○つき紙子
- 第八編 ● 小波叢書
 菊判特製函入美本 紙數千四百頁 正價金貳拾六錢
 小包料金拾六錢
 目次 ○あゝ京都 ○男の心 ○血 ○かつら川 ○大盤石 ○合はせ鏡 ○軍國女氣質

質の精と相俟つ最近出版界に彩色を添ふ

- 續刊 第九編 ● 秋聲叢書 (近刊) 第十編 ● 鏡花叢書

故樋口一葉著 一葉全集

全一冊 洋裝菊判
紙數 四百八十六頁
正金 四拾錢
郵稅 金 八錢

一葉女史の文壇に現はるゝや明治の紫女を以て評せられ其文の優美なる其想の幽玄なる實に稀代の天品なるは世既に定評あり本書は女史の遺稿を集成せしもの其生涯の才華收めて此中にあり諸子乞ふ一本を机上に備へよ

世輿 樣 氣 質 福田翠月君著 全一冊 四六判 美本 紙數 二百二頁 正價 金 參拾錢 郵稅 金 四錢

目次 (○輿樣十種 ○人の吟 ○結婚前の某嬢に答ふ ○大みそか ○土産日記 ○輿像となる事は易く輿像たる事は難し ○あはれな誇り ○會社員の輿像 ○母より ○霜夜 ○輿像の失望 ○餘興一滑稽體の滑稽

換 菓 篇 泉鏡花君作 外十四頁 全一冊 新形中判 紙數 三百頁 正價 金 六拾錢 郵稅 金 八錢

酒 道 樂 村井滋齋君著 全二冊 菊判和裝 紙數 五百五十四頁 正價 各五拾五錢 郵稅 各八錢

博文館發行

山崎紫紅著 一史劇十二曲

全一冊 四六判 表裝美
紙數 五百五十四頁
正金 九拾五錢
郵稅 金 八錢

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり。上場せられて都下の劇壇を賑はしたる歌舞伎物語。その夜の石田。亂れ篋。松一本。信玄最後。當流鉢木。破戒會我。外に明智光秀。戀の洞。その他三篇。を収めたり。著者の脚本は所謂机上の空想にあらず。如かもまた清新の氣ありて通俗の態なし劇に志ある諸君一讀を乞ふ。

小山内薫著 一演劇新潮

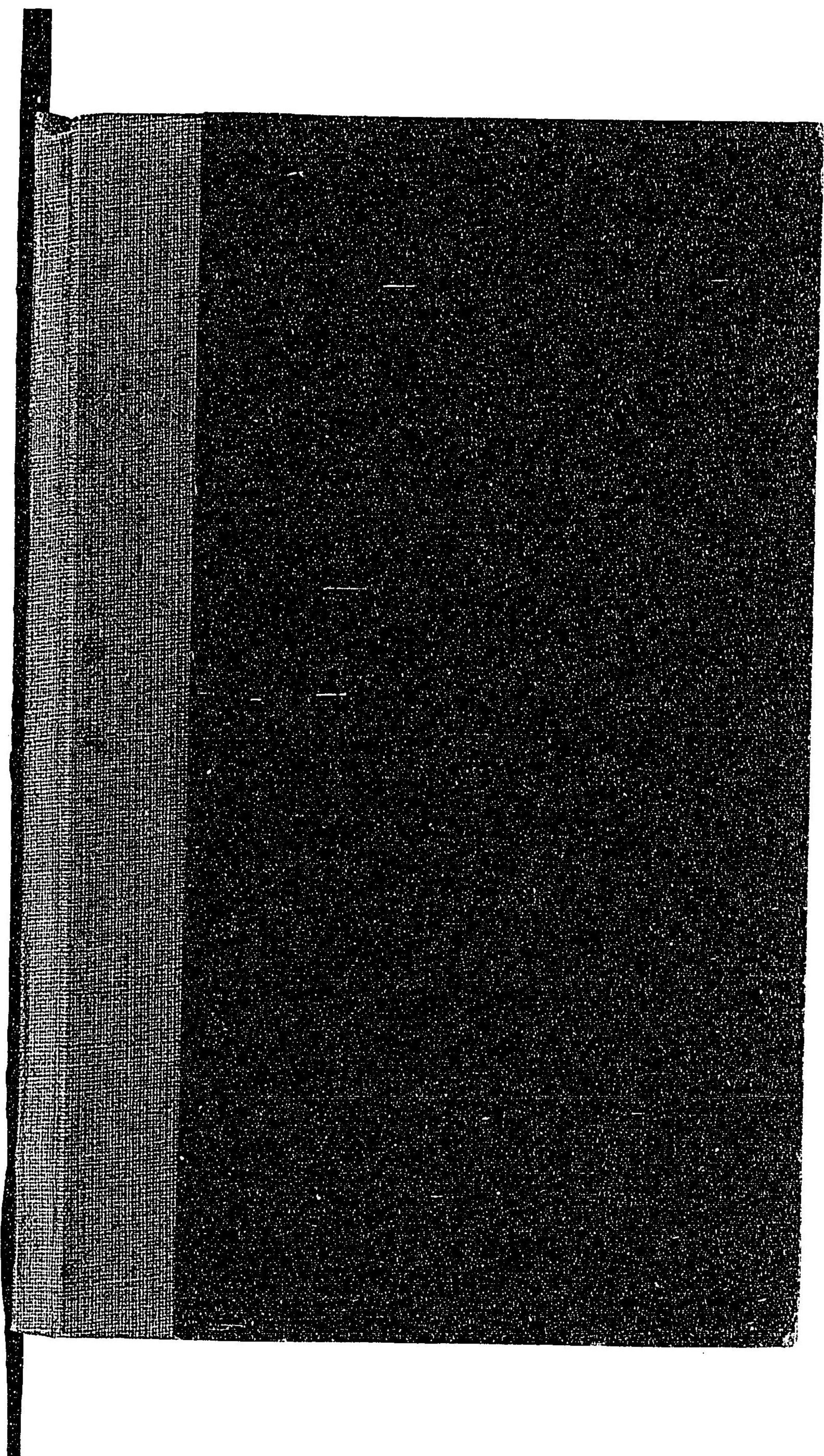
全一冊 四六判 美本
紙數 三百九十頁
正金 五拾五錢
郵稅 金 六錢

俳優は讀め！ 興業主は讀め！ 好劇家は讀め！ 好劇家は讀め！ 此の書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺演劇一切の實際的新思想の組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び、演劇革新の心願は數十種の新思潮を平明なる文趣味の書年若き著者たる演劇革新の心願は數十種の新思潮の紙間に收めらる。

博文館發行

338

12



338

12

101396-000-8

338-12

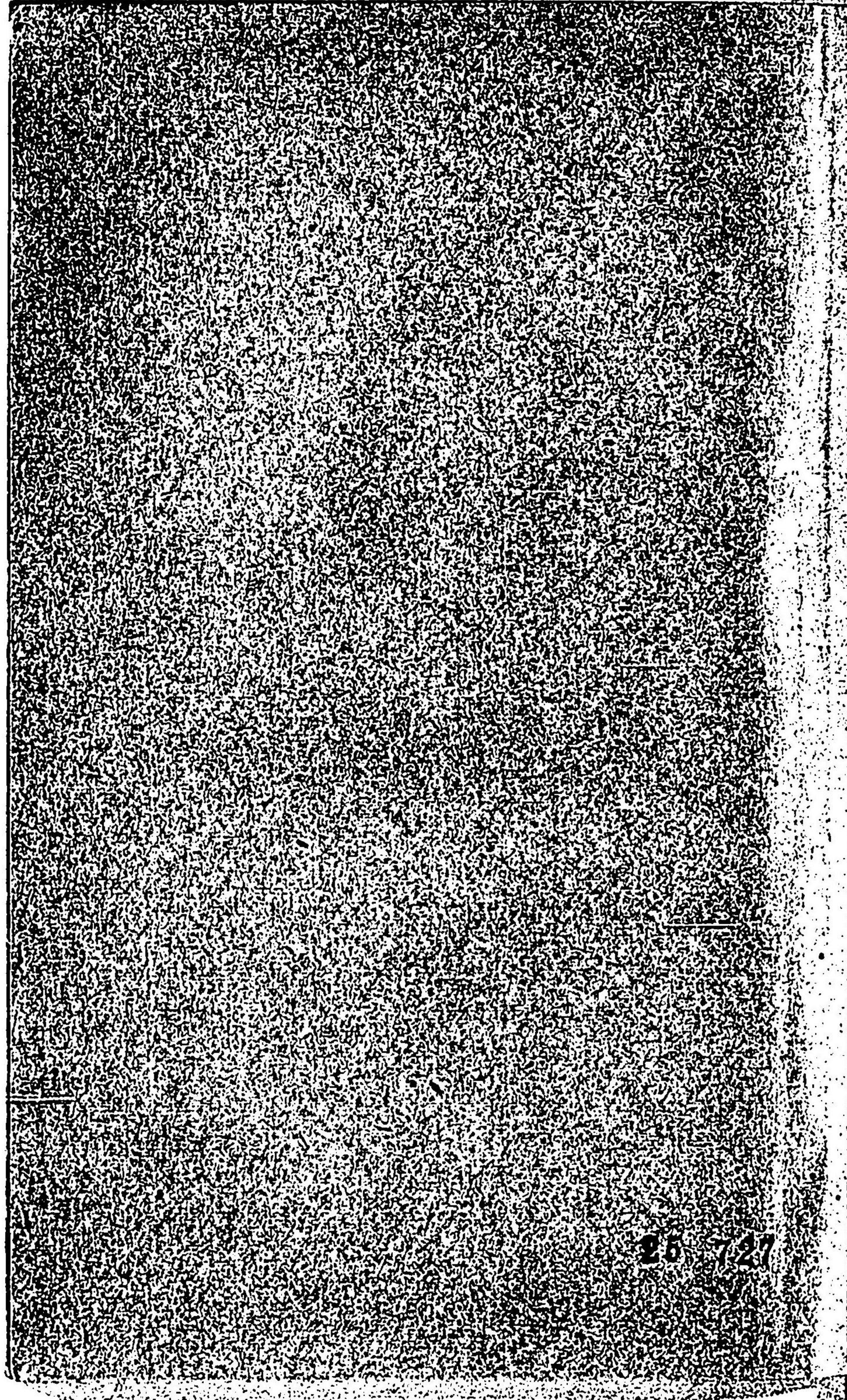
モウパッサン集

前田 晁/訳

M44

DBY-0731





25-727

